

## カムチベット語香格里拉県巴拉[mBaIhag] 方言の方言特徴

著者	鈴木 博之
雑誌名	国立民族学博物館研究報告
巻	37
号	1
ページ	53-90
発行年	2012-11-15
URL	<a href="http://doi.org/10.15021/00003855">http://doi.org/10.15021/00003855</a>

## カムチベット語香格里拉県巴拉 [mBalhag] 方言の方言特徴

鈴木博之\*

### Dialectal Characteristics of mBalhag [Bala] Tibetan Spoken in Shangri-La County

Hiroyuki Suzuki

本稿では、中国雲南省迪慶族自治州香格里拉県に位置し、四川省甘孜藏族自治州得榮県と接する尼西郷巴拉村において話されるカムチベット語 mBalhag 方言について音声分析を行い、それをもとにチベット文語形式（藏文）との対応関係を議論することを通じて方言特徴を明らかにする。

巴拉村は尼西郷の西部にある香格里拉大溪谷の巴拉格宗神山のふもとに位置する。この村は近年の観光開発が始まるまでほぼ孤立した状態におかれていた。この村の住民は現在の四川省甘孜州巴塘県付近から約 1000 年前に移住してきたという伝説があり、住民の話す言葉は迪慶州で話されるどのチベット語とも異なることで知られている。筆者は初歩的な調査から mBalhag 方言が sDerong-nJol 方言群に属すると考えているが、その位置づけの根拠を具体的にチベット言語学の方法で検証する必要がある。

考察の結果、藏文との音対応において mBalhag 方言は Sems-kyi-nyila 方言群の特徴を示す層および sDerong-nJol 方言群、Chaphreng 方言群の特徴を示す層を兼備しており、sDerong-nJol 方言群の対応形式が多くの基本語彙に対応することが明らかになった。

---

\* エクス・マルセイユ大学ボスドク研究員、国立民族学博物館外来研究員

**Key Words** : Tibetan, Diqing Prefecture, phonetics, dialectology, dialect classification  
キーワード：チベット語、迪慶州、音声学、方言学、方言分類

This paper explores the dialectal characteristics of mBalhag Tibetan, a Tibetan dialect spoken in Bala Hamlet in the western area of Nixi Village, Xianggelila County, Diqing Tibetan Autonomous Prefecture, Yunnan, China, based on phonetic analysis with the traditional method of Tibetan dialectology. Bala village is located at the foot of Mt. Balagezong in a deep valley, closer to Deirong County of Sichuan than any other sub-villages in Nixi. According to folk tradition, the inhabitants of this village came from today's Batang County around 1000 years ago, and remained isolated until the start of recent tourism development.

The author has always predicted that the mBalhag dialect would be found to belong to the sDerong-nJol group of Khams Tibetan based on preliminary research, thus necessitating further investigation according to the method of Tibetan dialectology, including an exhaustive phonetic analysis of the mBalhag dialect, a comparison between its sounds and Written Tibetan (WrT), and a comparison of these results with the case of multiple Tibetan dialects belonging to three groups: Sems-kyi-nyila, sDerong-nJol and Chaphreng.

The analysis shows that the mBalhag dialect genetically belongs to the sDerong-nJol group, because it has sound correspondences with this group in more basic vocabulary.

1 はじめに	3 mBalhag 方言の蔵文との対応関係
1.1 迪慶州のチベット語方言	3.1 初頭子音
1.2 mBalhag 方言をめぐって	3.2 母音および母音+末子音
1.3 本稿の構成	4 方言比較から見る mBalhag 方言の方言特徴
2 mBalhag 方言の音声分析	4.1 データ
2.1 音体系の素描	4.2 分析
2.2 超分節音	5 まとめ
2.3 母音	
2.4 子音	

## 1 はじめに

### 1.1 迪慶州のチベット語方言

雲南省北西部の一角、迪慶 [bDe-chen] 藏族自治州はチベット語がまとまって分布する地域の南東端に当たる。この地域はチベットの伝統的地域区分でカムと呼ばれる地域の南東端でもあり、同地域に分布するチベット語はカムチベット語の変種であると広く認識されているが、先行研究を整理すると、その下位区分に関して主張が分かれている（瞿霽堂・金效静 1981；張濟川 1993；Zhang 1996；格桑居冕・格桑央京 2002 など）。そこで筆者は現地調査を通して方言資料を収集し、それを用いて主に音声・音韻の特徴の観点から、新たな方言分類を試み（鈴木 2008b；2009ac；Suzuki 2009）、新たに未記述の方言の記述を通して必要な拡充を行ってきた（鈴木 2008a；2009bde；2010bcd；2011ab；2012；鈴木・ツェリ・ツォモ 2007；鈴木・丹珍曲措 2012；最新の見解は Suzuki 2012）。迪慶州のカムチベット語の下位分類は、現段階において次のようになる（所属方言例の [ ] 内は漢語名）。

方言区分	下位方言区分	所属方言例（迪慶州に限る）
Sems-kyi-nyila 香格里拉	rGyalthang	rGyalthang [建塘], rGyalbde [吉迪], Yangthang [小中甸], sKadgrag [格咱]
	雲嶺山脈東部	Nyishe [尼西], Thoteng [拖頂], Byagzhol [霞若], Semzong [石茸], Qidzong [其宗], mBacug [巴珠]
	Melung	Melung [維西], mThachu [塔城], Zhollam [勺洛]
	Phuri	Phuri [普上]
	Lamdo	Lamdo [浪都]
sDerong-nJol 得榮德欽	雲嶺山脈西部	Foshan [佛山], nJol [德欽], lCagspel [佳碧], Tsharethong [查里通], sNyingthong [尼通], Sakar [斯嘎], Budy [巴迪]
	sPomtserag	sPomtserag [奔子欄]
	gYagrwa	gYagrwa [羊拉]
	<b>mBalhag</b>	<b>mBalhag [巴拉]</b>
Chaphreng 鄉城	gTorwarong	gTorwarong [東旺], dBangshod [翁水], Nagskerag [納格拉]

以上の方言区分は今後十分な検証の必要とされるものも暫定的に含んでおり、本稿で扱う mBalhag 方言のほか、Phuri 方言の位置についてもあてはまる。なお、この分類は主に口語形式とチベット文語形式（以下「藏文」）の対応関係に基づいて行なわれている。また、今後の研究によって変更が加えられる可能性に注意が必要である。

## 1.2 mBalhag 方言をめぐる

mBalhag 方言は迪慶州香格里拉 [Sems kyi Nyi-zla] 県の北西部に位置する尼西 [Nyi-shar] 郷巴拉 ['Ba'-lhag] 村ただ 1 か村で話される方言である。同村の周辺には他に集落がなく、孤立した分布をなしている<sup>1)</sup>。この地域は巴拉格宗 ['Ba'-lhag sKal-'dzom] 神山を含む香格里拉大渓谷のただ中に位置し、近年巴拉村民による観光開発が始まるまでは、ほぼ完全に孤立した生活環境を保っていたという<sup>2)</sup>。当地の伝説によれば、巴拉村の村民は約 1000 年前に現在の四川省甘孜州巴塘県付近から移住してきたということであり、住民の話す言葉は迪慶州で話されるどのチベット語とも異なることで知られている。このような自然環境と伝説の存在によって、観光開発とともに学術調査もほどなく開始され、すでに地質学、地理学、人類学、民族学の各方面の研究が行われたと聞く。ただしこれらの成果に関する報告書の類は未入手である。

伝説が史実に忠実であるかどうか<sup>3)</sup>は別問題としても、長期にわたって孤立した環境にあったということは、その土地の方言形成を考えるにあたって、言語・方言間の接触を繰り返してきたカムチベット語諸方言の中でもまれな事例といえるだろう。この方言は巴拉村のみで話される変種であり、呉光范 (2009: 332) の記載によると、村民は 112 人で、みなチベット族である (統計資料の出典は不明)。ただし、村民の情報によると、2012 年 1 月現在、巴拉村には 14 戸 80 人程度が住み、香格里拉県県城建塘鎮には 19 戸 100 人程度が暮らしているということである。建塘鎮への移住は数十年前から行われ、移民は 1 世代めといえる。建塘鎮の巴拉村民の家庭では日常的に mBalhag 方言が用いられている。また、建塘鎮以外に移住した巴拉村民は少ない<sup>4)</sup>ということから、mBalhag 方言話者の概数を 200 人弱と見積もって差し支えないだろう。

mBalhag 方言の調査に関しては、筆者はまず昆明で巴拉村出身の友人の紹介を受け、その人の親戚で香格里拉県建塘鎮に住む巴拉村出身者を協力者として調査を行った。筆者はまだ巴拉村を訪れたことがない。建塘鎮在住の調査協力者の一家はみな巴拉村出身で、現在は同鎮に居住しているとはいえ、家庭内で使われる言語はすべて mBalhag 方言である。調査では主に漢語を用いて mBalhag 方言の語彙形式を聞き取り、記録した。

先に mBalhag 方言は迪慶州で話されるどのチベット語とも異なることで知られていると述べたが、mBalhag 方言の記録は、筆者のものを除き、おそらくこれまでになされたことがない。したがって言語学的な観点で書かれた資料や先行研究は存在しない。mBalhag 方言話者の言語感覚に照らしてみれば、周辺の方言とは明らかな異なりを認めることができるということである。mBalhag 方言の方言所属が特に興味を引くのは、先

述の伝説との兼ね合いからである。現在の筆者の考えでは、巴塘県の mBathang 方言はカムチベット語南路方言群に属する。一方巴拉村の周辺に分布する方言は Sems-kyi-nyila 方言群かまたは sDerong-nJol 方言群に属する。しかしながら、冒頭に述べたチベット語方言の分類に関する先行研究の主張を見るならば、これら3者は系統的にはより近い可能性が高く、mBalhag 方言がこの中のいずれかに近いことをチベット言語学の方法に基づいて示すことができれば、以上の伝説の位置づけもより明確になることが予測できる。

筆者は Suzuki (2011) において mBalhag 方言を sDerong-nJol 方言群に位置づけた。本稿はこの判断について具体的な言語分析に基づいて検証することを目標とするが、分析において明らかになるように、mBalhag 方言は鈴木 (2010c) で扱った Lamdo 方言と同じく一種の「混合方言」の様相を呈しており、「孤立していた」と伝えられるのに対して、主に sDerong-nJol 方言群 sDerong 下位方言の特徴と Sems-kyi-nyila 方言群の特徴を兼備していることが明らかになる。ただし地理的観点から見れば、mBalhag 方言はこの両者の分布地域に挟まれているため、この言語事実自体は奇異なものではないと判断できる。なお、この現象が示す歴史的な意味は本稿では議論しない。

### 1.3 本稿の構成

本稿では、まず mBalhag 方言の音声分析（音素の把握を目指す最小対に基づく厳密な音素分析ではない）を通して音体系の全体像を見る（2節）。次に、得られた口語形式と蔵文との対応関係について、瞿霽堂・金效静 (1981) や西 (1986) など多くの先行研究にならない、方言分類に大きく関わる点を明らかにしていく（3節）。その後、その対応関係を周辺のカムチベット語諸方言の事例と対比することを通じて mBalhag 方言の方言特徴を議論する（4節）。

なお、本稿で用いる音表記では、国際音声字母 (IPA) で規定されるもののほか、中国で慣用的に使用される音声記号 (朱曉農 2010 参照) も含めて用いる。また、特に文字の定められていない音については、必要に応じて新たな音標文字を作成する。

## 2 mBalhag 方言の音声分析

### 2.1 音体系の素描

まず mBalhag 方言の音体系全体について、超分節音、母音、子音、音節構造の順に紹介する。

#### 超分節音

4 種の声調が認められ、それぞれ語単位にかかる。

ˉ : 高平            ˊ : 上昇            ˋ : 下降            ˆ : 上昇下降

#### 母音

長短および鼻母音/非鼻母音の対立が存在するものがある。咽頭化母音/a<sup>h</sup>/も認められる。

i	u	ɯ u
e	ə ɐ	o
ɛ		ɔ
a	ɑ	

## 子音

子音連続の構成要素としてのみ現れるものも含めた一覧は以下のようである。

		両唇	歯	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	声門	
						前	後		
閉鎖音	無声有気	p <sup>h</sup>	t <sup>h</sup>	t <sup>h</sup>		c <sup>h</sup>	k <sup>h</sup>		
	無声無気	p	t	t̚		c	k	ʔ	
	有声	b	d	d̚		ɟ	g		
破擦音	無声有気		ts <sup>h</sup>			tɕ <sup>h</sup>			
	無声無気		ts			tɕ			
	有声		dz			dʒ			
摩擦音	無声有気		s <sup>h</sup>	ʃ <sup>h</sup>	ç <sup>h</sup>		x <sup>h</sup>		
	無声無気		ɬ	s	ʃ	ç	ç	x	h
	有声		ɬ̚	z	ʒ̚	ʒ	ɣ	ɦ	
鼻音	有声	m	n			ɲ	ŋ		
	無声	m̥	n̥			ɲ̥	ŋ̥		
流音	有声		l	r					
	無声		l̥						
半母音	有声	w				j			

## 音節構造

音節構造は、鈴木 (2005) を参照して以下のよう記述できる。

<sup>C</sup>C<sub>i</sub>GVCC および CC<sub>i</sub>GVCC

このうち C<sub>i</sub> (主子音) と V (音節核の母音) が必須である。

最初頭子音 <sup>C</sup> は前鼻音、前気音の 2 種のみが現れる。わたり音 G には/w, j/がある。よって最大の初頭子音群の構造は 3 子音連続となる。前鼻音を含む音節についてののみ、その鼻音要素の発音の仕方から、<sup>C</sup>C<sub>i</sub> と CC<sub>i</sub> に分けられ、後者の方が鼻音要素の調音時間が長い。

末子音には/ʔ, w, j; wʔ, jʔ/がある。



## 2.2 超分節音

mBalhag 方言の超分節音は、ピッチの高低による対立で実現され、高平調、上昇調、下降調、上昇下降調の4種に分かれる。弁別的なのは現れるピッチの高さ（調値）ではなく、平板か上昇もしくは下降などの型（調類）である。声調は語単位でかかるが、3音節以上の語の場合、第1、第2音節までで弁別的な声調の型を形成し、第3音節以降は〔<sup>22</sup>〕程度の高さで現れる。つまり、複音節語では各音節が独自の声調を持たず、語ごとにパターンが決まっている。なお、1音節語の上昇下降調は、その名称とは異なり、低平調（〔<sup>22</sup>〕程度）でかつ弱い息漏れを伴って実現されることが多い。この息漏れは十分軽微で、[<sub>h</sub>]と表記するには当たらない。

また、複音節語について語単独での発音では、第1音節に聴覚印象として明瞭な強勢が置かれる例が存在する。強勢が置かれた場合、その直後すなわち第2音節以降の声調が低平調で実現される。また、第2音節以降に強勢が置かれる例は認められない。しかしながら、強勢の実現は現段階の資料において対立が認められず、かつ自由変異であり、現れても現れなくても許容されるため、一律表記しない。

以下に、語の音節別の調値を5段階で表示した例をあげる。Sは音節を意味する。初頭子音の性質によって具体的な調値に若干の差異が生まれるが、弁別的ではない。

	高平調	上昇調	下降調	上昇下降調
1音節語	ˉmə [S <sup>55</sup> ] 「わな」	ˊma [S <sup>24</sup> ] 「母」	ˋmə [S <sup>53</sup> ] 「2」	ˆnə [S <sup>22</sup> ] 「人」
2音節語	ˉnū <sup>h</sup> ts̄ [S <sup>55</sup> S <sup>55</sup> ] 「植物油」	ˊmu za [S <sup>13</sup> S <sup>55</sup> ] 「めんどり」	ˋ <sup>f</sup> mo ma [S <sup>55</sup> S <sup>22</sup> ] 「低い」	ˆmo wa? [S <sup>12</sup> S <sup>31</sup> ] 「母ぶた」

## 2.3 母音

母音には長短および鼻母音/非鼻母音が弁別的である。母音の長短と鼻母音/非鼻母音は互いに独立しているため、計4種の対立が認められる。ただし、全ての舌位置について4種の対立が認められるわけではない。特に長鼻母音は出現に制限が見られ、また出現する頻度が相対的に低い。

「短母音+声門閉鎖音/ʔ」の組み合わせは、語（形態素）によって語中において長母

音と交替することがある。この場合は実際の発音に基づいて記述する。咽頭化母音/a<sup>ʕ</sup>/は非鼻母音のみが認められる。

以下、非鼻母音と鼻母音に分けて、その長短の具体例を並列して掲げる。

### 2.3.1 非鼻母音

	短母音例		長母音例	
i	ʕzi gi	文字	ʕwi:	光
e	ʕ <sup>h</sup> keʔ	声	ʕ <sup>h</sup> ke: pə	腰
ɛ	ʕ <sup>h</sup> dɛʔ pa	翼	ʕ <sup>h</sup> ke: wō	星
a	ʕka rə	青靛	ʕka: ts <sup>h</sup> e	赤ん坊
a <sup>ʕ</sup>	ʕ <sup>h</sup> a <sup>ʕ</sup> ʔ	血	ʕ <sup>h</sup> a <sup>ʕ</sup> : h <sup>h</sup> tsa	血管
ɑ	ʕ <sup>h</sup> ɑʔ	ぶた	ʕ <sup>h</sup> ɑ:	雪
ɔ	ʕ <sup>h</sup> gɔ <sup>h</sup> gwaʔ	幅広い	ʕ <sup>h</sup> gɔ: ruʔ	脊椎
o	ʕko te	おんどり	ʕ <sup>h</sup> go: ro	猫背の人
u	ʕku wa	革	ʕ <sup>h</sup> ku: lɑʔ we	はやぶさ
ʉ	ʕ <sup>h</sup> ku mə	泥棒	ʕ <sup>h</sup> dzɯ:	牧民
ə	ʕ <sup>h</sup> gə <sup>n</sup> dzɯʔ	指	ʕ <sup>h</sup> zə: lō	天気
ɯ	ʕ <sup>h</sup> u lu	子ぶた	ʕ <sup>h</sup> tu:	子馬
ø	ʕpøʔ	チベット人	ʕ <sup>h</sup> ø: pə	額

### 2.3.2 鼻母音

/ʉ/には鼻母音が認められず、さらに調音位置/ɛ, a, ɔ, o/以外の母音には長鼻母音が認められない。

/ɛ, ā, ū, ũ, ǝ/およびすべての長鼻母音は出現例が少ない。

	短母音例		長母音例	
i	ʕ <sup>n</sup> dza lī	世界		
e	ʕ <sup>h</sup> dzēj	池		
ɛ	ʕ <sup>h</sup> zɛ̃ jaʔ dowʔ	左	ʕɛ̃:	種
a	ʕ <sup>h</sup> go fiã	卵		
ɑ	ʕjã <sup>n</sup> dzã	プレスレット	ʕwã:	乳
ɔ	ʕ <sup>n</sup> dzō rī	遠い	ʕ <sup>h</sup> tɕō:	柳

<b>o</b>	ʰdzõ	町	ʰpõ:	霜/娘
<b>u</b>	ʰi wũ	妹		
<b>uu</b>				
<b>ə</b>	ʰtɕõ	小便		
<b>u</b>	ʰdũ ʰɰ:	瓦		
<b>e</b>	ʰõ ʰbi:	綿		

## 2.4 子音

子音は、初頭単子音、初頭子音連続および末子音に分けて具体例を挙げつつ考察する。

### 2.4.1 初頭単子音

単子音の具体例は、可能な限り 2 例ずつ挙げる。

#### 閉鎖音・破擦音

mBalhag 方言は閉鎖音・破擦音に声門閉鎖音を除き無声有気、無声無気、有声の 3 系列を有する。

硬口蓋閉鎖音系列/c<sup>h</sup>, c, ɟ/の調音点は硬口蓋のやや後部で、しばしば口蓋化軟口蓋閉鎖音 [k<sup>h</sup>, k<sup>j</sup>, g<sup>j</sup>] で実現される。若年層の発音において、これらが軟口蓋閉鎖音に合流する例も認められる。

前部硬口蓋破擦音系列/tɕ<sup>h</sup>, tɕ, dz/は前舌母音に先行するとき、後部歯茎破擦音 [t<sup>h</sup>, tʃ, dʒ] で実現される。また、無声有気、無気前部硬口蓋破擦音は語中でそれぞれそり舌摩擦音 [ɕ<sup>h</sup>, ɕ] と交替する場合がある。この場合は決して [t<sup>h</sup>, ʃ] で実現されることはない。

有声音については単子音として現れる例は相対的に少なく、しばしば語中に見られる。

	例語	語義	例語	語義
<b>p<sup>h</sup></b>	ʰp <sup>h</sup> ɑ?	ぶた	ʰp <sup>h</sup> u mu	男女
<b>p</b>	ʰpa	めす牛	ʰpu <sup>h</sup> pa?	皮
<b>b</b>	ʰbə gu	唐辛子	ʰbu:	貧しい
<b>t<sup>h</sup></b>	ʰt <sup>h</sup> õ nõ	草地	ʰt <sup>h</sup> u: tɛ:	黄銅
<b>t</b>	ʰtɔ?	毒	ʰtu wa	煙
<b>d</b>	ʰda tɔ	昨日		
<b>t<sup>h</sup></b>	ʰt <sup>h</sup> ɑ	歌	ʰɕ <sup>h</sup> e t <sup>h</sup> ɔ?	苗

t	ʔa wa	僧侶	ʔə wā	垢
ɖ	ʔa ɖa	土ねずみ	ʰm ba ɖu	車輪
c <sup>h</sup>	ʰc <sup>h</sup> aʔ	血	ʰc <sup>h</sup> u:	アルミ
c	ʰca:	甕	ʰce: pə	腹
ʃ	ʰ <sup>h</sup> de je:	鉄なべ		
k <sup>h</sup>	ʰk <sup>h</sup> a	口	ʰk <sup>h</sup> uɪ fia	スープ
k	ʰka: ts <sup>h</sup> e	赤ん坊	ʰku wa	革
g	ʰ <sup>n</sup> dzɪu ga	指輪	ʰ <sup>n</sup> do gɔ̃	夕食
ʔ	ʔa bu	兄	ʔo no	これ
ts <sup>h</sup>	ʰts <sup>h</sup> a	塩	ʰts <sup>h</sup> ə	犬
ts	ʰtsɔ̃	壁	ʰtso wa	孤児
dz	ʰdzɔ̃ [ʰɔ̃ʔ]	チベット服	ʰxɔ̃ dzə ʰçā	ブーツ
tç <sup>h</sup>	ʰtç <sup>h</sup> ə wā	帯	ʰtç <sup>h</sup> uɪ	水
tç	ʰtça	茶	ʰtçu:	ロバ
dz	ʰtə dzɔ̃ʔ	ミミズ	ʰ <sup>n</sup> t <sup>h</sup> e dzī	親指

### 摩擦音

mBalhag 方言は摩擦音に有気、無気、有声の3系列を有する歯茎摩擦音、そり舌摩擦音、前部硬口蓋摩擦音、軟口蓋摩擦音と無声、有声の2系列を有する歯端-歯裏側面摩擦音、声門摩擦音、および硬口蓋摩擦音/ç/が認められる。

無声歯端-歯裏摩擦音/ɸ/は後続母音により主に3種類の条件異音が認められ、[ɸ<sup>i</sup>]は/i, e, ə/の前に、[ɸ<sup>T</sup>]（無声無気舌尖歯端閉鎖音）は/u, o, ə/の前に、[ɸ<sup>ɪ</sup>]はそれ以外の母音の前に現れる。/ɸ/と対をなす有声音/β/は [β] に近く発音され、摩擦が弱いだけでなく時に流音のような聴覚印象をもつ。さらに詳細な音声学的特徴については Suzuki (forthcoming) を参照。

有声音については単子音として現れる例は相対的に少なく、しばしば語中に見られる。/x<sup>h</sup>, ɣ/は語中に現れる頻度が高い。/x, h/は出現例がきわめて少数である。

	例語	語義	例語	語義
ɸ	ʰtə	土	ʰtu	歯
β	ʰ <sup>n</sup> ə βa	曜日	ʰβu:	大工

s <sup>h</sup>	ˈs <sup>h</sup> ɛ	屁	ˈs <sup>h</sup> ɔ	がけ
s	ˈsa	にわとり	ˈsu:	ひよこ
z	ˈjā za	もみあげ	ˈpe za	兄弟
ʂ <sup>h</sup>	ˈʂ <sup>h</sup> a	肉	ˈʂ <sup>h</sup> ĩ	丸太
ʂ	ˈʂə lə	梨	ˈʂĩ	畑
ʐ	ˈtʂ <sup>h</sup> e zō	氷	ˈʔa zi	姉
ʧ <sup>h</sup>	ˈʧ <sup>h</sup> a: kə lɔ?	蝶	ˈtʂ <sup>h</sup> e: ɣə	夜
ʧ	ˈʧa: h <sup>h</sup> tsə	洞窟	ˈtʂə ta	胸
ʐ	ˈzə za	ゆがんだ	ˈh <sup>h</sup> kā zĩ	乾燥地
ʧ	ˈʧa	神	ˈʧā	靴
x <sup>h</sup>	ˈx <sup>h</sup> ɔw?	粥	ˈfi ma x <sup>h</sup> a	傷口
x	ˈxɔ dzə ˈʧā	ブーツ		
ɣ	ˈh <sup>h</sup> tʂa? ɣa:	火箸	ˈje ɣɛ:	月
h	ˈha: ˈko mə	知り合い	ˈhə? hə?	ゆるい
fi	ˈfiɔ rɔ?	洞穴	ˈfiu: pə	ふくろう

共鳴音

mBalhag 方言の共鳴音は半母音/w, j/を除いて有声と無声の系列が存在する。

	例語	語義	例語	語義
m	ˈma	母	ˈmo wa?	母ふた
m̥	ˈm̥a x <sup>h</sup> a	夕方	ˈm̥e:	あざ
n	ˈna zu	耳	ˈnɯ:	黄牛
n̥	ˈn̥a	鼻	ˈn̥ũ	油
n̥	ˈn̥a re	母の姉妹	ˈn̥ə	人
n̥	ˈn̥ũ	竹	ˈn̥ĩ	心臓
ŋ	ˈŋa	私	ˈŋa ˈn̥də	鬼
ŋ̥	ˈŋ̥a s <sup>h</sup> o?	前	ˈŋ̥e: h <sup>h</sup> pō	枕
l	ˈla sa	ラサ	ˈlu: pə	体
l̥	ˈl̥a dzi	鍵	ˈl̥aw t̥ə ˈk <sup>h</sup> ɔ	学校
r	ˈra	山羊	ˈrə	山
w	ˈwa	狐	ˈwā:	乳

j jã 道 ju: 子綿羊

#### 2.4.2 初頭子音連続

mBalhag 方言に見られる子音連続の組み合わせ数は比較的多いが、その組み合わせのパターンは単純で、前鼻音、前気音、わたり音を含むものに分けられる。前の2者とわたり音は独立して現れることができるから、最大で3子音連続を形成するが、その出現頻度は低い。

以下、まずわたり音を除く2子音連続について前鼻音と前気音に分類して例を挙げ、ついでわたり音を含む2子音連続、3子音連続と続けて例を挙げる。

##### 前鼻音

前鼻音には、鼻音部が後続子音より弱く発音される狭義の前鼻音と、後続子音より強く発音されるタイプのものがある。後者は朱曉農 (2007: 10; 2010: 146-147) が「後爆鼻音」と呼ぶものに近いと考えられ、通常発話速度が早い場合鼻音のみの発音になるという特徴があるが、mBalhag 方言の場合は発話速度が遅くても鼻音のみになるときがある。このタイプは狭義の前鼻音つきの子音連続をもつ語でも音声学的に現れることがある。詳細は鈴木 (2010a: 110-112) を参照。ただしこの現象は、鼻音の後続子音が脱落したのではなく、鼻音に同化したと分析できる。鼻音だけが聞こえる場合、その調音は単独の鼻音よりもやや長い。また、いくつかの狭義の前鼻音でも、発話速度が速い場合には聴覚印象として鼻音だけが際立つ。

有声音に先行するものと無声有気音に先行するものが認められ、前鼻音は子音連続間で調音位置と有声性が一致する。

鼻音部が後続子音より弱く発音されるタイプ

- <sup>m</sup>b : <sup>m</sup>bɯ 虫
- <sup>n</sup>d : <sup>n</sup>du: 弾丸
- <sup>ɲ</sup>d : <sup>ɲ</sup>dj: 米
- <sup>ɲ</sup>j : <sup>ɲ</sup>jɔ めすヤク
- <sup>ɲ</sup>g : <sup>ɲ</sup>gɛ: 鍛冶屋
- <sup>n</sup>dz : <sup>n</sup>dzɯ: 指
- <sup>ɲ</sup>dz : <sup>ɲ</sup>dzɔ̃ ナシ族
- <sup>m</sup>p<sup>h</sup> : <sup>m</sup>p<sup>h</sup>aj 比べる

$n_t^h$  :  $\cdot n_t^h u m\theta$  高い  
 $n_t^h$  :  $\cdot n_t^h s$  生きている  
 $n_c^h$  :  $\cdot n_c^h \theta fia$  胆嚢  
 $n_k^h$  :  $\cdot n_k^h e: l\theta$  腎臓  
 $n_{ts}^h$  :  $\cdot n_{ts}^h e pa$  脾臓  
 $n_{t\zeta}^h$  :  $\cdot n_{t\zeta}^h i mba$  肝臓  
 $n_s^h$  :  $\cdot n_s^h a?$  掃く  
 $n_c^h$  :  $\cdot n_c^h u?$  強奪する

鼻音部が後続子音より強く発音されるタイプ

$mb$  :  $\cdot mba l\alpha?$  巴拉村  
 $nd$  :  $\cdot nd\bar{e} mba$  泥  
 $n_j$  :  $\cdot n_j o?$  去勢する  
 $n_g$  :  $\cdot n_g o t^h o?$  回(数)  
 $n_{dz}$  :  $\cdot ja: n_{dz} \omega?$  ひじ

前気音

有声音に先行するものと無声無気音に先行するものが認められ、また子音連続間で有聲性が一致する。

$h_p$  :  $\cdot h_p u$  息子  
 $h_t$  :  $\cdot h_t a$  馬  
 $h_c$  :  $\cdot h_c a$  髪  
 $h_k$  :  $\cdot h_k e?$  声  
 $h_{ts}$  :  $\cdot h_{ts} \theta wa$  草  
 $h_{t\zeta}$  :  $\cdot h_{t\zeta} \alpha?$  鉄  
 $h_t$  :  $\cdot h_t \theta:$  金  
 $h_s$  :  $\cdot h_s \bar{s}$  のり  
 $h_l$  :  $\cdot h_l \bar{s}$  風  
 $h_c$  :  $\cdot h_c \theta:$  雲

鈴木 カムチベット語香格里拉県巴拉 [mBalhag] 方言の方言特徴

$h^h\zeta$  :  $^h\zeta a?$  鷹  
 $^h b$  :  $^h bi$ : pə 蛙  
 $^h d$  :  $^h du$  石  
 $^h d$  :  $^h q\zeta$  砂糖  
 $^h j$  :  $^h \zeta \tilde{a}$   $^h jo$  ボタン  
 $^h g$  :  $^h go$   $^h \tilde{a}$  卵  
 $^h dz$  :  $^h dza$  漢族  
 $^h dz$  :  $^h dz \zeta$   $^h \tilde{a}$  蚤  
 $^h \zeta$  :  $^h \zeta \zeta$  めのう  
 $^h z$  :  $^h za?$  ヤク  
 $^h z$  :  $^h z \zeta$  4  
 $^h z$  :  $^h z \tilde{e}$   $^h ja?$   $^h dow?$  左  
 $^h m$  :  $^h ma$  傷  
 $^h n$  :  $^h n \tilde{a}$  空  
 $^h \eta$  :  $^h \eta i?$  目  
 $^h \eta$  :  $^h \eta w$  銀  
 $^h l$  :  $^h lu?$  明かり  
 $^h j$  :  $^h j \zeta$  おす牛

わたり音を含む2子音連続

わたり音には/w/および/j/がある。

組み合わせの種類は豊富であるが、多くの組み合わせで見られる語が少ない。

/w/のもの

$k^h w$  :  $k^h we$  パンケーキ  
 $kw$  :  $^h ja$ :  $^h kwa$  手  
 $\zeta^h w$  :  $\zeta^h wa$  溝  
 $x^h w$  :  $x^h wa$  咲く  
 $\eta w$  :  $\eta w \zeta$  [動詞接尾辞の1つ]  
 $rw$  :  $^h rwa$  つの



/j/のもの

- ts<sup>h</sup>j : ˀts<sup>h</sup>jō: とげ
- tɕ<sup>h</sup>j : ˀtɕ<sup>h</sup>ja: tsō 芽
- tj : ˀtjā 靈魂
- lj : ˀhtɕəlje 舌

### 3 子音連続

- <sup>ɰ</sup>gw : ˀɰgwa 頭
- <sup>h</sup>kw : ˀ<sup>h</sup>kwaʔ 壊して開ける
- <sup>fi</sup>gw : ˀ<sup>fi</sup>gwejʔ 秃鷹
- <sup>h</sup>pj : ˀje<sup>h</sup>pje: ジャッカル

#### 2.4.3 末子音

mBalhag 方言に認められる末子音には, /ʔ, w, j; wʔ, jʔ/がある。このうち, /ʔ/が大部分の例を占める。末子音は先行する母音との共起制限があり, 特に長母音とは結びつかない。また, 末子音/j/は鼻母音/ɛ/に後続するという偏りが認められる。以下に絶対語末および語中に分けて例をあげる。

	絶対語末例		語中例	
	例語	語義	例語	語義
ʔ	ˀbɔʔ	空気	ˀtsəʔ wā	肋骨
w			ˀts <sup>h</sup> əw ruʔ	恥骨
j	ˀdzēj	池	ˀkēj po	口蓋
wʔ	ˀtowʔ	命		
jʔ	ˀts <sup>h</sup> ejʔ	関節		

### 3 mBalhag 方言の蔵文との対応関係

蔵文と口語形式の対応関係は, チベット語方言の特徴を分析する伝統的な手法であり, さまざまな先行研究において一定の注目すべき対応関係が示されている。ただし

注目すべき点が分析の対象となる方言によって異なってきて、必ずしも先行研究に扱われる通りの特徴を見るだけでは十分でない。この議論は現代の方言の分析であるものの、通時的な議論にも通じる。個別方言の分析と方言比較の手法によって、方言所属を問題にする場合にはかなりの精度の結果を得ることが可能となる。

ここでは、西 (1986) や西田 (1987), 張濟川 (2009: 259-357) などに提示される特徴を中心に、さらに鈴木 (2008b; 2009a) や Suzuki (2008ab) で示されている迪慶州のチベット語方言で注目される特徴を考慮に入れつつ、mBalhag 方言における現象を整理する。ただし、声調については蔵文との対応関係の面でなお不透明な部分もあるため、本稿では扱わない。なお、蔵文は Wylie 式の転写で示す。チベット文字の表す音価は格桑居冕・格桑央京 (2004: 379-390) を参照。

議論は初頭子音と母音 + 末子音の 2 種に分けて行う。

### 3.1 初頭子音

#### 3.1.1 閉鎖・破擦・摩擦音の有声性

mBalhag 方言では、閉鎖・破擦音および摩擦音について、蔵文で基字に先行する子音がない有声音字 *g, j, d, b, dz, zh, z* は、基本的にそれぞれの調音位置の無声無気音に対応する。たとえば、以下のようなものである。

ᵀpō: 「娘」 ( <i>bu mo</i> )	ᵀṣwa 「帽子」 ( <i>zhwa</i> )
ᵀlō 「熊」 ( <i>dom</i> )	ᵀḷe 「ごはん」 ( <i>zan</i> )

また、これらの文字に足字がある場合も同じく無声無気音に対応する。たとえば、以下のようなものである。

ᵀsa 「鶏」 ( <i>bya</i> )	ᵀṭʰʔ 「6」 ( <i>drug</i> )
ᵀsō 「壁」 ( <i>gyang</i> )	ᵀce: pə 「腹」 ( <i>grod pa</i> )

以上の蔵文有声音字に先行子音（頭字，前接字）が存在するとき、mBalhag 方言では有声音で現れる。たとえば、以下のようなものである。

ᵀᵀdu 「石」 ( <i>rdo</i> )	ᵀᵀdza 「漢族」 ( <i>rgya</i> )
ᵀᵀdzi fia 「蚤」 ( <i>lji ba</i> )	ᵀᵀga 「愛する」 ( <i>dga'</i> )
ᵀᵀzɯ: 「蛇」 ( <i>sbrul</i> )	ᵀᵀzɕ 「4」 ( <i>bzhi</i> )

なお、藏文 db 対応形式には有声閉鎖音が現れ、以下のようなになる。

$\text{ʰbɔʔ}$  「空気」 (*dbug*)                       $\text{ʰbɔ}$  「権力」 (*dbang*)

### 3.1.2 藏文 sh, zh 対応形式

mBalhag 方言では、基本的にそり舌摩擦音が対応する。たとえば、以下のようなのである。

$\text{ʃ}^{\text{h}}\text{a}$  「肉」 (*sha*)                               $\text{ʰzə}$  nī ju 「おとし」 (*gzhis ning lo*)  
 $\text{ʃ}^{\text{h}}\text{iʔ}$  「しらみ」 (*shig*)                       $\text{ʃi}$  「耕地」 (*zhing*)

### 3.1.3 藏文 c, ch, j 対応形式

mBalhag 方言では、基本的に前部硬口蓋破擦音が対応する。音声学的には前述のとおり、母音との組み合わせによって後部歯茎破擦音で実現される。たとえば、以下のようなのである。

$\text{ʰtɕ}^{\text{h}}\text{u}$  「水」 (*chu*)                               $\text{ʰtɕu}$  「10」 (*bcu*)  
 $\text{ʰtɕ}^{\text{h}}\text{i}$  mba 「肝臓」 (*mchin pa*)               $\text{ʰdzi}$  fia 「蚤」 (*lji ba*)

藏文 ch が語中に来る場合、摩擦音で現れる例があるが、この場合調音点は一律そり舌音となる。

$\text{ʰjə}$   $\text{ʃ}^{\text{h}}\text{u}$  「金沙江」 (*'bri chu*)               $\text{k}^{\text{h}}\text{a}$   $\text{ʃ}^{\text{h}}\text{u}$  「よだれ」 (*kha chu*)

### 3.1.4 藏文足字 y 対応形式

藏文足字 y 対応形式は大きく藏文 Py 対応形式と Ky 対応形式に分かれる。

藏文 Py は、p, ph, b に足字 y を伴う形式を含む形式についていう。

mBalhag 方言では基本的に 2 通りの対応関係が認められ、歯茎摩擦音および前部硬口蓋摩擦音が対応する。たとえば、以下のようなのである。

歯茎摩擦音例	前部硬口蓋破擦音例
$\text{ʃ}^{\text{h}}\text{uʔ}$ 「家畜」 ( <i>phyugs</i> )	$\text{ɕ}^{\text{h}}\text{i}$ : $\text{x}^{\text{h}}\text{a}$ 「半分」 ( <i>phyed kha</i> )
$\text{ʃa}$ 「鶏」 ( <i>bya</i> )	$\text{ɕə}$ wā 「砂」 ( <i>bye ma</i> )
$\text{ʰsəʔ}$ $\text{x}^{\text{h}}\text{a}$ 「春」 ( <i>dpyad ka</i> )	$\text{ʰza}$ $\text{x}^{\text{h}}\text{a}$ 「夏」 ( <i>dbyar kha</i> )
$\text{ʰsə}$ 「糊」 ( <i>spyin</i> )	

また、同一の形態素が語によってこれら2種それぞれに対応する例もある。たとえば *ci ja* 「ねずみ」 (*byi ba*) と *so<sup>h</sup> tso?* 「ねずみの糞」 (*byi skyag*) など。

藏文 Ky は、k, kh, g に足字 y を伴う形式を含む全ての対応形式についていう。

mBalhag 方言では基本的に2通りの対応関係が認められ、歯茎破擦音および前部硬口蓋破擦音に対応する。この場合の前部硬口蓋破擦音も母音との組み合わせによって後部歯茎破擦音で実現される。たとえば、以下のようなものである。

歯茎破擦音例	前部硬口蓋破擦音例
<i>ts<sup>h</sup>ə</i> 「犬」 ( <i>khyi</i> )	<i>tʰə?</i> 「あなた」 ( <i>khyod</i> )
<i>tsō</i> 「壁」 ( <i>gyang</i> )	<i>h<sup>h</sup>ci: pu</i> 「幸せな」 ( <i>skyid po</i> )
<i>ʰdze?</i> 「8」 ( <i>brgyad</i> )	<i>ʰdza</i> 「100」 ( <i>brgya</i> )

以上の例のうち、「あなた」は *tʰə?* のように歯茎破擦音で発音されることもある。このような例はきわめて少ない。

### 3.1.5 藏文足字 r 対応形式

藏文足字 r を含む形式には、Pr (=pr, phr, br を含む形式)、Kr (=kr, khr, gr を含む形式)、tr/dr など閉鎖音を含むもののほか、sr などもある。mBalhag 方言では、Pr, Kr, tr/dr, sr で全く異なる対応関係を示す。ここでは sr 以外を扱う。

まず、Pr 対応形式については前部硬口蓋摩擦音に対応する。たとえば、以下のようである。

<i>ʰca: h<sup>h</sup>tsə</i> 「洞窟」 ( <i>brag</i> ?)	<i>ʰzu:</i> 「蛇」 ( <i>sbrul</i> )
<i>ʰcu:</i> 「猿」 ( <i>spre'u</i> )	<i>ʰẽ ŋa</i> 「数珠」 ( <i>phreng ba</i> )

ただし、いくつかの例、特に藏文 'br の組み合わせはそり舌閉鎖音や硬口蓋閉鎖音に対応する。

<i>ʰtō tʰa?</i> 「1000」 ( <i>stong phrag</i> )	<i>ʰjə</i> 「めすヤク」 ( <i>'bri</i> )
<i>ʰde:</i> 「米」 ( <i>'bras</i> )	<i>ʰjə?</i> 「龍」 ( <i>'brug</i> )

Kr 対応形式については、基本的に硬口蓋閉鎖音に対応する。この発音は、若年層の一部の発音において軟口蓋閉鎖音で実現される場合があり、見かけ上足字 r 対応音が

脱落しているかのように見える。また, Kr が ag と組み合わせるとき, 咽頭化母音が対応するのも特徴的である。たとえば, 以下のようである。

˘c <sup>h</sup> aʔ 「血」 ( <i>khrag</i> )	˘cã <sup>h</sup> jo 「ボタン」 (? <i>sgro</i> )
˘cə 「ナイフ」 ( <i>gri</i> )	˘h <sup>h</sup> c <sup>h</sup> ə fiu 「胆嚢」 ( <i>mkhris pa</i> )

ただし, そり舌閉鎖音や足字 r が脱落したと考えられる形式と対応関係を見せる例がある。

˘tʰə tʰaʔ 「1 万」 ( <i>khri phrag</i> )	˘gu 「行く」 ( <i>'gro</i> )
˘ta ts <sup>h</sup> ʅ 「寺」 ( <i>grwa tshang</i> )	

tr/dr 対応形式については, (')dr のみが確認されているが, 基本的にそり舌閉鎖音が対応する。たとえば, 以下のようである。

˘tu: 「鈴」 ( <i>dril bu</i> )	˘ŋa <sup>h</sup> qə 「鬼」 ( <i>'dre</i> )
˘tʰəʔ 「6」 ( <i>drug</i> )	

### 3.1.6 藏文基字 s, z 対応形式

mBalhag 方言では, 他のチベット語方言とは異なり, 藏文基字 s, z について歯摩擦音 /s, z/ が対応する。特に /s/ に閉鎖音を含む条件変異が複数見られるのは 2.4.1 に述べたとおりである。たとえば, 以下のようである。

˘ʂa 「土」 ( <i>sa</i> )	˘ʂʅ 「銅」 ( <i>zangs</i> )
˘ʂe: 「果物」 ( <i>sil</i> )	˘ʂu: 「大工」 ( <i>bzo ba</i> )
˘hʂe: 「金」 ( <i>gser</i> )	˘hʂiʔ 「豹」 ( <i>gzig</i> )

sr 対応形式についても, 同じく歯摩擦音 /s/ が対応する。たとえば, 以下のようである。

˘ʂowʔ 「命」 ( <i>srog</i> )	˘ʂe: mə 「豆」 ( <i>sran ma</i> )
˘ʂə ʂəʔ 「薄い」 ( <i>srab srab</i> )	˘hʂʅ 「守る」 ( <i>bsrung</i> )

より詳細な状況は Suzuki (forthcoming) を参照。

### 3.1.7 藏文基字 l, y 対応形式

mBalhag 方言では、基本的に藏文 l には /j/ が、藏文 y には /z/ が対応する。後者の中には /z/ に対応するものもある。たとえば、以下のようである。

ʼjā 「道」 ( <i>lam</i> )	ʼzi gi 「文字」 ( <i>yi ge</i> )
ʼja: kwa 「手」 ( <i>lag pa</i> )	ʼfi zaʔ 「ヤク」 ( <i>g.yag</i> )
ʼju 「年」 ( <i>lo</i> )	ʼfi ze fiō 「花椒」 ( <i>g.yer ma</i> )

ただし藏文 l に /l/ が、藏文 y に /j/ が対応するものもあり、たとえば、以下のようである。

l/ の例	/j/ の例
ʼlu: pə 「体」 ( <i>lus po</i> )	ʼja x <sup>h</sup> a 「上」 ( <i>yar kha</i> )
ʼle: 「縁」 ( <i>las</i> )	ʼjaʔ 「よい」 ( <i>yag</i> )

「よい」の例は、藏文 *legs* に対応する可能性もある。

### 3.1.8 藏文足字 l 対応形式

mBalhag 方言では、藏文 sl を除き藏文足字 l には /j/ または /l/ が対応する。このとき、前気音が先行することが多い。たとえば、以下のようである。

/j/ の例	/l/ の例
ʼje ɣɛ: 「月 (天体)」 ( <i>zla dkar</i> )	ʼfi le: pa 「脳」 ( <i>klad pa</i> )
ʼfi ja: 「ジャコウジカ」 ( <i>gla ba</i> )	ʼfi lē ŋu 「笛」 ( <i>gling bu</i> )
ʼfi ju 「馬の腹帯」 ( <i>glo</i> )	ʼfi la mə 「ラマ」 ( <i>bla ma</i> )

また、ʼh<sub>15</sub> 「風」 (*rlung*) のように /l/ で対応する例も認められるが、例外といえる。藏文 sl については次で述べる。

### 3.1.9 藏文 lh, sl 対応形式

mBalhag 方言では、基本的に硬口蓋摩擦音 /ç/ が対応する。たとえば、以下のようである。

˘ça 「神」 ( <i>lha</i> )	˘ça 「編む」 ( <i>sla</i> )
˘çã 「靴」 ( <i>lham</i> )	˘je: çã 「簡単な」 ( <i>las sla</i> )

また、藏文 *sl* 対応形式の中には ˘law tɕ ˘kʰɔ 「学校」 (*slab grwa khang*) のように /l/ で対応する例も認められるが、例外といえる。加えて、藏文 *lh* 対応形式の中には ˘heʔ heʔ 「ゆるい」 (*lhod lhod*) のように /h/ で対応する例も認められるが、これもまた例外といえる。

### 3.1.10 藏文足字 *w* 対応形式

*mBalhag* 方言では、藏文足字 *w* に対応すると見られる音形式が現れる例がある。たとえば、以下のようである。

˘hʰtsə wa 「草」 ( <i>rtswa</i> )	˘rwa 「角 (つの)」 ( <i>rwa</i> )
˘ʂə wa 「帽子」 ( <i>zhwa</i> )	

しかし、˘tsʰa 「塩」 (*tshwa*) などには /w/ を含む第 2 音節が現れない。

### 3.1.11 藏文 *s*+鼻音字を含む形式

*mBalhag* 方言では、藏文鼻音字に頭字 *s* を伴う形式には、調音位置の対応する無声鼻音で現れる。たとえば、以下のようである。

˘mẽ 「薬」 ( <i>sman</i> )	˘ñĩ 「心臓」 ( <i>snying</i> )
˘ñõ <sup>m</sup> ba 「狂人」 ( <i>smyon pa</i> )	˘ña 「鼻」 ( <i>sna</i> )

### 3.1.12 前鼻音を含む子音連続

*mBalhag* 方言の前鼻音を含む子音連続は、前鼻音要素に後続する子音に無声有気音と有声音があり、それは藏文前接字 ˘, *m* と対応するものが多い。前鼻音要素と後続する子音は、調音位置、有声性について一致する。たとえば、以下のようである。

˘ᵝgwa 「頭」 ( <i>mgo ba</i> )	˘ᵝkʰe: lə 「腎臓」 ( <i>mkhal ba</i> )
˘ᵝjã 「周辺」 ( <i>˘gram</i> )	˘ᵝtɕʰu pa 「唇」 ( <i>mchu pa</i> )

### 3.1.13 そのほかの特徴

mBalhag 方言では、蔵文 m を初頭子音とする語が前部硬口蓋鼻音/ŋ/に対応するものがある。たとえば、以下のようである。

ˈŋiʔ 「目」 (mig)                      ˈŋā 「名前」 (ming)  
 ˈŋə 「人」 (mi)

これらの中には古蔵文において my とつづられていた語も含まれており、古蔵文の形式に対応関係を求めることもできる。「目」は声調や前気音の現れも考えると、古蔵文の *dmyig* と対応するといえる。なお、もともと蔵文で my を含む *myong* 「～したことがある」は ˈŋō に対応する。

## 3.2 母音および母音 + 末子音

語末位置における基本的な対応関係は以下のように示すことができる。ただし、蔵文再添後字 s は口語形式に明確な対応関係を得られないため、以下の表では省略する。

V\C	#/'	b	d	g	m	n	ng	r	l	s
a	a	awʔ	eʔ	aʔ / ˈaːʔ	ā	ē	ō / ǒ	ɛ: / ɛ:	ɛ:	ɛ: / i:
i	ə	ɔʔ	iʔ / ˈiʔ	iʔ	ī	ĩ	ĩ / ẽj	ɯ:	ɯ:	i:
u	u	uʔ	uʔ	ɔʔ	ō	ũ	ō	ɯ:	u: / ɯ:	u
e	e	ɔwʔ	e:	aʔ	ā	ĩ	ẽ	ɛ: / ɛ:	ɯ:	i:
o	u	ɔʔ	ɵʔ / eʔ	oʔ / owʔ	ō	ē	ǒ	ɵ: / ɯ:	ɯ:	ɯ:

/ で区切っているものは自由変異ではなく、語ごとに決まったものである。

ˈ がついているものは、蔵文 Kr を初頭子音とする場合の対応形式である。

mBalhag 方言では、必ずしも蔵文との対応関係は一対一になるとは限らず、上に示したのは主要な傾向である。

基本的な傾向として、蔵文で開音節のものは短母音と対応し、末子音が鼻音の場合は鼻母音、閉鎖音の場合は声門閉鎖を伴う短母音、それ以外の末子音の場合は長母音と対応するようになる。

なお、長鼻母音の例は以上の表に現れないが、蔵文対応形式を考えると、2音節が縮約したものに对应する。



ᵛpō: 「霜」 (*ba mo*)

ᵛḗ: 「種」 (*sa bon*)

ᵛpō: 「娘」 (*bu mo*)

ᵛḥtᵛᵛ: 「柳」 (*lcang ma*)

#### 4 方言比較から見る mBalhag 方言の方言特徴

前節で明らかにした mBalhag 方言と蔵文との対応関係において見いだされるチベット言語学上注目すべき特徴の 1 つに、1 つの蔵文形式に複数の音対応が存在し、それぞれの音対応に何が例外であるか判断が困難な程度の語数が認められるという点がある。この mBalhag 方言の性質は、他のチベット語方言には見られないものであり、筆者はこの特徴が成立した背景に周辺の諸方言からの影響すなわち方言接触の可能性を仮定したい。

そこで本節ではチベット語の方言比較を通じて mBalhag 方言の方言特徴を探ることにする。冒頭で紹介したように、mBalhag 方言の分布地域は方言区分上複数の方言群に囲まれているため、それぞれの方言群に属する方言の資料が必要とされる。

まず、方言の提示における方便として、本節で扱う方言について、方言分類にそれぞれ略号を次のように定める。ただし、mBalhag 方言には略号を与えない。

方言群	下位方言群	略号
Sems-kyi-nyila	rGyalthang	A1
	雲嶺山脈東部	A2
	Melung	A3
	Phuri	A4
	Lamdo	A5
sDerong-nJol	sDerong	B6
	雲嶺山脈西部	B7
	sPomtserag	B8
	gYagrwa	B9
Chaphreng	Chaphreng	C10
	gTorwarong	C11

本節では、蔵文対応形式のうち対応関係が比較的安定しており、かつチベット言語学において重要な役割を担っている初頭子音の形式に注目する。まず、問題となる蔵

文形式に対応する口語形式のデータを表形式で掲げ、そののち分析を行う。

#### 4.1 データ

ここでは3つの対照表を掲げる。最初の2つは蔵文阻害音字にかかわる問題、3つめは蔵文共鳴音字にかかわる問題で、いずれも **3.1** で扱ったものである。それぞれ表の直前に、取り上げる語について通し番号をつけて示す。表にはそれぞれの初頭子音の対応形式のみを提示する。各表の左端は方言名である。各方言の話される地域については、本文末尾に一括して掲げる。表内の方言名の右に、上に示した方言分類の所属略号を添える。

藏文 Py, Ky, Pr, Kr, Tr, C, s, z (先行子音がない場合)

- |                       |                     |                      |                        |
|-----------------------|---------------------|----------------------|------------------------|
| 1. <i>bya</i> 「にわとり」  | 5. <i>brang</i> 「胸」 | 9. <i>chu</i> 「水」    | 13. <i>sran ma</i> 「豆」 |
| 2. <i>bye ma</i> 「砂」  | 6. <i>khrag</i> 「血」 | 10. <i>ja</i> 「茶」    |                        |
| 3. <i>gyong</i> 「壁」   | 7. <i>gri</i> 「ナイフ」 | 11. <i>sa</i> 「地」    |                        |
| 4. <i>kyhod</i> 「あなた」 | 8. <i>drug</i> 「6」  | 12. <i>zan</i> 「ごはん」 |                        |

No. 藏文形式	1 <i>by</i>	2 <i>by</i>	3 <i>gy</i>	4 <i>khy</i>	5 <i>br</i>	6 <i>kh</i>	7 <i>gr</i>	8 <i>dr</i>	9 <i>ch</i>	10 <i>j</i>	11 <i>s</i>	12 <i>z</i>	13 <i>sr</i>
mBalhag	s	ɕ	ts	tɕ <sup>h</sup>	ɕ	c <sup>h</sup>	c	t	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	ʃ	ʃ	ʃ
sDerong B6	s	s	ts	ts <sup>h</sup>	t	t <sup>h</sup>	-	t	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	s <sup>h</sup>	s	s
Zulung B6	s	s	ts	ts <sup>h</sup>	t	t <sup>h</sup>	t	t	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	s <sup>h</sup>	s	h <sub>s</sub>
mPhagri C11	s	s	tɕ	tɕ <sup>h</sup>	t	t <sup>h</sup>	t	t	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	s <sup>h</sup>	s	h <sub>s</sub>
gTorwarong C11	s	s	tɕ	ɕ/tɕ	t	t <sup>h</sup>	t	t	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	s <sup>h</sup>	s	h <sub>s</sub>
Lando A5	ɕ	ɕ	-	tɕ <sup>h</sup>	ɕ	c <sup>h</sup>	c	t	tɕ <sup>h</sup>	ʃ	s <sup>h</sup>	s	h <sub>s</sub>
Phuri A4	ɕ	ɕ	tɕ	tɕ <sup>h</sup>	ɕ	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	t	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	s <sup>h</sup>	s	h <sub>s</sub>
sKadrag A1	ɕ	ɕ	tɕ	tɕ <sup>h</sup>	ɕ	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	t	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	s <sup>h</sup>	s	-
rGyalbde A1	ɕ	ɕ	tɕ	tɕ <sup>h</sup>	-	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	t	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	s <sup>h</sup>	s	h <sub>s</sub>
rGyalthang A1	ɕ	ɕ	tɕ	tɕ <sup>h</sup>	ɕ	tɕ <sup>h</sup>	-	t	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	s <sup>h</sup>	s	h <sub>s</sub>
Yangthang/G A1	ɕ	ɕ	tɕ	tɕ <sup>h</sup>	ɕ	c <sup>h</sup>	c	t	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	s <sup>h</sup>	s	-
Yangthang/C A1	ɕ	ɕ	tɕ	tɕ <sup>h</sup>	ɕ	c <sup>h</sup>	c	t	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	s <sup>h</sup>	s	-
Nyishe A2	ɕ	ɕ	-	tɕ <sup>h</sup>	ɕ	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	t	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	s <sup>h</sup>	s	s <sup>h</sup>
Thoteng A2	ɕ	ɕ	tɕ	tɕ <sup>h</sup>	ɕ	tɕ <sup>h</sup>	-	t	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	s <sup>h</sup>	s	s
Byagzhol/B A2	ɕ	ɕ	-	tɕ <sup>h</sup>	ɕ	tɕ <sup>h</sup>	-	t	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	s <sup>h</sup>	s	h <sub>s</sub>
Byagzhol/S A2	ɕ	ɕ	-	tɕ <sup>h</sup>	ɕ	tɕ <sup>h</sup>	t	t	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	s <sup>h</sup>	s	h <sub>s</sub>
Qidzong A2	ɕ	h <sub>ɕ</sub>	tɕ	tɕ <sup>h</sup>	h <sub>ɕ</sub>	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	t	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	s <sup>h</sup>	s	s <sup>h</sup>
mBacug A2	ɕ	ɕ	-	tɕ <sup>h</sup>	ɕ	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	t	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	s <sup>h</sup>	s	h <sub>s</sub>
Zhollam A3	ɕ	ɕ/s	tɕ	tɕ <sup>h</sup>	-	k <sup>h</sup>	k	t/t	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	s <sup>h</sup>	s	h <sub>s</sub>
Melung A3	ɕ	ɕ	-	tɕ <sup>h</sup>	-	tɕ <sup>h</sup>	k	t	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	s <sup>h</sup>	s	h <sub>s</sub>
mThachu A3	ɕ	ɕ	tɕ	tɕ <sup>h</sup>	-	k <sup>h</sup>	k	t	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	s <sup>h</sup>	s	h <sub>s</sub>
Daan A3	ɕ	-	-	tɕ <sup>h</sup>	ɕ	k <sup>h</sup>	k	t	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	s <sup>h</sup>	s	ɕ
gYagrwa B9	tɕ	tɕ	tɕ	tɕ <sup>h</sup>	t	t <sup>h</sup>	t	t	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	s <sup>h</sup>	s	s
sPomtserag/G B8	ɕ	ɕ	tɕ	tɕ <sup>h</sup>	t	t <sup>h</sup>	f <sup>h</sup> d	t	c <sup>h</sup>	c	s <sup>h</sup>	s	s
Foshan B7	ɕ	ɕ	-	tɕ <sup>h</sup>	-	t <sup>h</sup>	t	t	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	s <sup>h</sup>	s	-
nJol B7	ɕ	ɕ	tɕ	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	tɕ	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	s <sup>h</sup>	s	-
lCagspel B7	ɕ	ɕ	-	tɕ <sup>h</sup>	t	t <sup>h</sup>	t	t	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	ts <sup>h</sup>	s	s <sup>h</sup>
gYanggril B7	ɕ	ɕ	tɕ	tɕ <sup>h</sup>	-	t <sup>h</sup>	-	t	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	s <sup>h</sup>	s	-
Tsharethong B7	ɕ	ɕ	tɕ	tɕ <sup>h</sup>	-	t <sup>h</sup>	t	t	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	s <sup>h</sup>	s	h <sub>s</sub>
sNyingthong B7	ɕ	ɕ	tɕ	tɕ <sup>h</sup>	t	t <sup>h</sup>	t	t	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	s <sup>h</sup>	s	h <sub>s</sub>
Sakar B7	ɕ	ɕ	tɕ	tɕ <sup>h</sup>	-	t <sup>h</sup>	t	t	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	s <sup>h</sup>	s	h <sub>s</sub>
Budy/J B7	ɕ	ɕ	-	tɕ <sup>h</sup>	t	t <sup>h</sup>	t	t	tɕ <sup>h</sup>	tɕ	s <sup>h</sup>	s	s <sup>h</sup>

蔵文 Py, Ky, Pr, Kr, Tr, C, s, z (先行子音あり)

14. *spyang* 「狼」      18. *sbrul* 「蛇」      22. *'gro* 「行く」      26. *bzo ba* 「職人」  
 15. *dbyar* 「夏」      19. *'bras* 「米」      23. *'dre* 「鬼」  
 16. *brgyad* 「8」      20. *'brug* 「龍」      24. *bcu* 「10」  
 17. *skyyid* 「幸せな」      21. *skra* 「髪」      25. *gser* 「金」

No. 蔵文形式	14 <i>spy</i>	15 <i>dby</i>	16 <i>brgy</i>	17 <i>sky</i>	18 <i>sbr</i>	19 <i>'br</i>	20 <i>'br</i>	21 <i>skr</i>	22 <i>'gr</i>	23 <i>'dr</i>	24 <i>bc</i>	25 <i>gs</i>	26 <i>bz</i>
mBalhag	h <sub>c</sub>	fi <sub>z</sub>	fi <sub>dz</sub>	h <sub>tc</sub>	fi <sub>z</sub>	ŋ <sub>d</sub>	ŋ <sub>j</sub>	h <sub>c</sub>	ŋ <sub>g</sub>	ŋ <sub>d</sub>	h <sub>tc</sub>	h <sub>t</sub>	h <sub>z</sub>
sDerong B6	ç	-	fi <sub>dz</sub>	-	fi <sub>d</sub>	ŋ <sub>d</sub>	ŋ <sub>d</sub>	h <sub>t</sub>	ŋ <sub>d</sub>	-	h <sub>tc</sub>	h <sub>s</sub>	fi <sub>z</sub>
Zulung B6	ç	z	fi <sub>dz</sub>	h <sub>s</sub>	fi <sub>d</sub>	ŋ <sub>d</sub>	ŋ <sub>d</sub>	h <sub>t</sub>	ŋ <sub>d</sub>	ŋ <sub>d</sub>	h <sub>tc</sub>	h <sub>s</sub>	z
mPhagri C11	ç	z	fi <sub>dz</sub>	h <sub>ç</sub>	fi <sub>d</sub>	ŋ <sub>d</sub>	ŋ <sub>d</sub>	h <sub>t</sub>	ŋ <sub>d</sub>	ŋ <sub>d</sub>	h <sub>tc</sub>	s	-
gTorwarong C11	h <sub>s</sub>	z	z	h <sub>s</sub>	fi <sub>d</sub>	ŋ <sub>d</sub>	ŋ <sub>d</sub>	h <sub>t</sub>	ŋ <sub>d</sub>	m <sub>d</sub>	h <sub>tc</sub>	h <sub>s</sub>	fi <sub>z</sub>
Lamdo A5	ç	z	dz	h <sub>tc</sub>	z	ŋ <sub>j</sub>	ŋ <sub>d</sub>	h <sub>c</sub>	ŋ <sub>gw</sub>	ŋ <sub>d</sub>	h <sub>t</sub>	h <sub>s</sub>	fi <sub>z</sub>
Phuri A4	h <sub>ç</sub>	fi <sub>j</sub>	fi <sub>dz</sub>	h <sub>tc</sub>	fi <sub>z</sub>	ŋ <sub>j</sub>	ŋ <sub>j</sub>	h <sub>tc</sub>	ŋ <sub>g</sub>	ŋ <sub>d</sub>	h <sub>tc</sub>	h <sub>s</sub>	fi <sub>z</sub>
sKadrag A1	ç	j	fi <sub>dz</sub>	h <sub>tc</sub>	z	ŋ <sub>g</sub>	ŋ <sub>dz</sub>	h <sub>tc</sub>	ŋ <sub>gw</sub>	ŋ <sub>d</sub>	h <sub>tʃ</sub>	h <sub>s</sub>	z
rGyalbde A1	ç	z	fi <sub>dz</sub>	h <sub>tc</sub>	z	ŋ <sub>g</sub>	ŋ <sub>dz</sub>	h <sub>tc</sub>	ŋ <sub>gw</sub>	ŋ <sub>d</sub>	h <sub>tʃ</sub>	h <sub>s</sub>	fi <sub>z</sub>
rGyalthang A1	ç	z	w <sub>dz</sub>	h <sub>tc</sub>	z	ŋ <sub>g</sub>	ŋ <sub>dz</sub>	h <sub>tc</sub>	ŋ <sub>gw</sub>	ŋ <sub>d</sub>	h <sub>tʃ</sub>	h <sub>s</sub>	-
Yangthang/G A1	ç	z	fi <sub>dz</sub>	-	z	ŋ <sub>g</sub>	ŋ <sub>j</sub>	h <sub>c</sub>	ŋ <sub>gw</sub>	ŋ <sub>d</sub>	h <sub>tʃ</sub>	s <sub>h</sub>	-
Yangthang/C A1	ç	z	fi <sub>dz</sub>	-	γ	ŋ <sub>g</sub>	ŋ <sub>j</sub>	h <sub>c</sub>	ŋ <sub>gw</sub>	ŋ <sub>d</sub>	h <sub>tʃ</sub>	s <sub>h</sub>	-
Nyishe A2	ç	z	fi <sub>dz</sub>	-	γ	ŋ <sub>g</sub>	ŋ <sub>dz</sub>	h <sub>tc</sub>	ŋ <sub>gw</sub>	-	h <sub>tʃ</sub>	s	-
Thoteng A2	ç	fi <sub>z</sub>	fi <sub>dz</sub>	t <sub>c</sub>	z	-	ŋ <sub>dz</sub>	h <sub>tc</sub>	ŋ <sub>g</sub>	-	h <sub>tʃ</sub>	h <sub>s</sub>	fi <sub>z</sub>
Byagzhol/B A2	ç	-	fi <sub>dz</sub>	h <sub>tc</sub>	z	-	ŋ	h <sub>tc</sub>	ŋ <sub>gw</sub>	ŋ <sub>d</sub>	h <sub>tʃ</sub>	h <sub>s</sub>	zw
Byagzhol/S A2	ç	-	fi <sub>dz</sub>	-	fi <sub>g</sub>	-	ŋ	h <sub>tc</sub>	ŋ	ŋ <sub>d</sub>	h <sub>tʃ</sub>	h <sub>s</sub>	-
Qidzong A2	ç	zj	fi <sub>dz</sub>	-	γ	ŋ <sub>g</sub>	ŋ <sub>dz</sub>	h <sub>tc</sub>	ŋ <sub>gw</sub>	ŋ <sub>d</sub>	h <sub>tʃ</sub>	h <sub>s</sub>	-
mBacug A2	ç	z	fi <sub>dz</sub>	h <sub>tc</sub>	?	ŋ <sub>dz</sub>	ŋ <sub>dz</sub>	h <sub>tc</sub>	ŋ <sub>gw</sub>	ŋ <sub>d</sub>	h <sub>tʃ</sub>	h <sub>s</sub>	z
Zhollam A3	-	-	fi <sub>dz</sub>	-	fi <sub>b</sub>	m <sub>b</sub>	m <sub>b</sub>	h <sub>k</sub>	ŋ <sub>gw</sub>	ŋ <sub>d</sub>	h <sub>tʃ</sub>	h <sub>s</sub>	z
Melung A3	-	-	fi <sub>dz</sub>	h <sub>tc</sub>	fi <sub>b</sub>	m <sub>b</sub>	m	h <sub>k</sub>	ŋ <sub>g</sub>	-	h <sub>tʃ</sub>	h <sub>s</sub> h	-
mThachu A3	ç	fi <sub>j</sub>	fi <sub>dz</sub>	h <sub>tc</sub>	fi <sub>b</sub>	m <sub>b</sub>	m <sub>b</sub>	h <sub>k</sub>	ŋ <sub>g</sub>	ŋ <sub>d</sub>	h <sub>tʃ</sub>	h <sub>s</sub> h	z
Daan A3	-	-	fi <sub>dz</sub>	-	fi <sub>b</sub>	ŋ <sub>g</sub>	ŋ <sub>gw</sub>	h <sub>k</sub>	ŋ <sub>gw</sub>	ŋ <sub>d</sub>	h <sub>tʃ</sub>	h <sub>c</sub>	z
gYagrwa B9	ç	fi <sub>j</sub>	fi <sub>dz</sub>	h <sub>c</sub>	fi <sub>d</sub>	ŋ <sub>d</sub>	ŋ <sub>d</sub>	h <sub>t</sub>	ŋ <sub>d</sub>	ŋ <sub>d</sub>	h <sub>tc</sub>	h <sub>s</sub>	-
sPomtserag/G B8	ç	-	fi <sub>dz</sub>	h <sub>tc</sub>	fi <sub>d</sub>	ŋ <sub>d</sub>	ŋ <sub>d</sub>	t	ŋ <sub>d</sub>	ŋ <sub>d</sub>	h <sub>c</sub>	h <sub>s</sub>	z
Foshan B7	ç	-	fi <sub>dz</sub>	ç	fi <sub>d</sub>	ŋ <sub>d</sub>	ŋ <sub>d</sub>	h <sub>t</sub>	ŋ <sub>d</sub>	ŋ <sub>d</sub>	h <sub>tc</sub>	h <sub>s</sub>	fi <sub>z</sub>
nJol B7	ç	fi <sub>j</sub>	fi <sub>dz</sub>	ç	fi <sub>dʒ</sub>	ŋ <sub>dʒ</sub>	ŋ <sub>dʒ</sub>	tʃ	ŋ <sub>dʒ</sub>	ŋ <sub>dʒ</sub>	h <sub>tc</sub>	h <sub>s</sub>	fi <sub>z</sub>
lCagspel B7	ç	z	dz	ç	fi <sub>d</sub>	ŋ <sub>d</sub>	ŋ <sub>d</sub>	t	ŋ <sub>d</sub>	-	h <sub>tc</sub>	h <sub>s</sub>	-
gYanggril B7	-	-	fi <sub>dz</sub>	h <sub>ç</sub>	fi <sub>z</sub>	ŋ <sub>d</sub>	ŋ <sub>d</sub>	h <sub>t</sub>	ŋ <sub>d</sub>	ŋ <sub>d</sub>	h <sub>tc</sub>	-	-
Tsharethong B7	ç	z	fi <sub>dz</sub>	ç	fi <sub>d</sub>	ŋ <sub>d</sub>	ŋ <sub>d</sub>	h <sub>t</sub>	ŋ <sub>d</sub>	ŋ <sub>d</sub>	h <sub>tc</sub>	h <sub>s</sub>	fi <sub>z</sub>
sNyingthong B7	ç	z	fi <sub>dz</sub>	-	fi <sub>d</sub>	ŋ <sub>d</sub>	ŋ <sub>d</sub>	t	ŋ <sub>g</sub>	-	h <sub>tc</sub>	h <sub>s</sub>	-
Sakar B7	ç	-	fi <sub>dz</sub>	h <sub>ç</sub>	fi <sub>d</sub>	ŋ <sub>d</sub>	ŋ <sub>d</sub>	h <sub>t</sub>	ŋ <sub>gw</sub>	ŋ <sub>d</sub>	h <sub>tc</sub>	h <sub>s</sub>	-
Budy/J B7	-	-	b <sub>dz</sub>	-	b <sub>d</sub>	ŋ <sub>d</sub>	ŋ <sub>d</sub>	t	ŋ <sub>g</sub>	ŋ <sub>d</sub>	h <sub>tc</sub>	h <sub>s</sub> h	-

藏文 l, y

- |                |                |                |                   |
|----------------|----------------|----------------|-------------------|
| 27. lam 「道」    | 31. rlung 「風」  | 35. lhod 「緩い」  | 39. g.yer ma 「花椒」 |
| 28. lus 「体」    | 32. zla ba 「月」 | 36. yul 「故郷」   |                   |
| 29. glang 「牛」  | 33. sla 「簡単な」  | 37. yi ge 「文字」 |                   |
| 30. bla ma 「僧」 | 34. lha 「神」    | 38. g.yag 「ヤク」 |                   |

No. 藏文形式	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39
mBalhag	l	l	gl	bl	rl	zl	sl	lh	lh	y	y	g.y	g.y
	j	l	h <sub>j</sub>	h <sub>l</sub>	h <sub>l</sub>	h <sub>j</sub>	ç	ç	h	z	z	h <sub>z</sub>	h <sub>z</sub>
sDerong B6	j	-	h <sub>l</sub>	-	w <sub>l</sub>	w <sub>l</sub>	-	-	-	z	-	h <sub>j</sub>	-
Zulung B6	j	j	j <sup>h<sub>j</sub></sup>	l	h <sub>l</sub>	n <sub>l</sub>	l	ç	ç	z	z	h <sub>z</sub>	z
mPhagri C11	j	l	h <sub>j</sub>	h <sub>l</sub>	h <sub>l</sub>	n <sub>l</sub>	l	l	ç	z	j	z	h <sub>z</sub>
gTorwarong C11	j	l	j	h <sub>l</sub>	h <sub>l</sub>	n <sub>l</sub>	l	l	j	z	j	h <sub>z</sub>	h <sub>z</sub>
Lamdo A5	j	j	h <sub>j</sub>	h <sub>l</sub>	h <sub>lw</sub>	j	ç	ç	ç	z	z	-	z
Phuri A4	j	l	h <sub>l</sub>	h <sub>l</sub>	h <sub>l</sub>	n <sub>d</sub>	ç	ç	ç	j	z	-	h <sub>z</sub>
sKadrag A1	l	l	l	h <sub>l</sub>	h <sub>l</sub>	n <sub>d</sub>	l	l	l	j	j	-	h <sub>j</sub>
rGyalbde A1	l	l	lj	l	h <sub>l</sub>	n <sub>d</sub>	-	l	-	j	j	h <sub>j</sub>	h <sub>j</sub>
rGyalthang A1	l	l	-	w <sub>l</sub>	h <sub>l</sub>	n <sub>d</sub>	h	l	-	j	j	j	h <sub>j</sub>
Yangthang/G A1	l	l	h <sub>l</sub>	-	h <sub>l</sub>	n <sub>d</sub>	l	l	-	-	j	h <sub>j</sub>	-
Yangthang/C A1	l	l	h <sub>l</sub>	h <sub>l</sub>	h <sub>l</sub>	n <sub>d</sub>	l	l	l	j	j	h <sub>j</sub>	h <sub>j</sub>
Nyishe A2	l	l	l	-	w <sub>l</sub>	d	l	-	l	j	j	j	-
Thoteng A2	l	l	l	-	l	n <sub>l</sub>	-	-	-	j	j	h <sub>j</sub>	h <sub>j</sub>
Byagzhol/B A2	l	l	l	-	w <sub>l</sub>	n <sub>l</sub>	-	-	-	j	j	-	h <sub>j</sub>
Byagzhol/S A2	l	l	l	h <sub>l</sub>	w <sub>l</sub>	n <sub>l</sub>	l	l	n <sub>l</sub>	j	j	-	h <sub>j</sub>
Qidzong A2	l	l	l	h <sub>l</sub>	w <sub>l</sub>	n <sub>l</sub>	-	x <sub>l</sub>	l	j	j	h <sub>j</sub>	h <sub>j</sub>
mBacug A2	l	l	l	h <sub>l</sub>	h <sub>l</sub>	n <sub>l</sub>	l	-	-	j	j	-	h <sub>j</sub>
Zhollam A3	l	l	l	-	h <sub>l</sub>	n <sub>l</sub>	-	-	-	j	j	-	h <sub>j</sub>
Melung A3	l	l	l	-	w	n <sub>l</sub>	-	-	-	j	-	-	h <sub>j</sub>
mThachu A3	l	l	h <sub>l</sub>	l	h <sub>l</sub>	n <sub>l</sub>	h <sub>l</sub>	l	-	j	j	h <sub>j</sub>	h <sub>j</sub>
Daan A3	l	l	l <sup>h<sub>l</sub></sup>	-	h <sub>l</sub>	l	-	x	-	j	j	-	h <sub>j</sub>
gYagrwa B9	l	l	l	h <sub>l</sub>	h <sub>l</sub>	n <sub>d</sub>	l	l	l	z	z	h <sub>j</sub>	h <sub>z</sub>
sPomtserag/G B8	j	j	h <sub>j</sub> /l	-	h <sub>j</sub>	j	ç	ç	-	z	-	z	z
Foshan B7	l	l	-	h <sub>l</sub>	h <sub>l</sub>	h <sub>d</sub>	l	l	l	j	j	-	h <sub>j</sub>
nJol B7	j	l	l	-	h <sub>l</sub>	n <sub>l</sub>	l	l	ç/l	z	z	z	j
lCagspel B7	j	j	h <sub>l</sub>	-	h <sub>l</sub>	n <sub>l</sub>	ç	-	ç/l	z	z	j/z	z
gYanggril B7	j	j	j	h <sub>l</sub>	h <sub>j</sub>	j	ç	-	-	z	z	-	h <sub>z</sub>
Tsharethong B7	j	j	j <sup>h<sub>j</sub></sup>	h <sub>l</sub>	h <sub>j</sub>	n <sub>d</sub>	ç	l/ç	ç	z	j	h <sub>z</sub>	h <sub>z</sub>
sNyingthong B7	j	j	j	-	j	j	n <sub>l</sub>	-	-	j	j	h <sub>z</sub>	z
Sakar B7	l	l	l	l	h <sub>l</sub>	n <sub>l</sub>	-	l	lj	j	j	-	h <sub>j</sub>
Budy/J B7	l	l	l	-	w <sub>l</sub>	l	l	l	-	j	j	j	h <sub>j</sub>

## 4.2 分析

ここでは、個別の蔵文対応関係についての類型および mBalhag 方言における蔵文対応関係の多様性という 2 つの角度から分析を行う。

### 4.2.1 個別の蔵文対応関係についての類型に関する分析

先に提示した 3 つの表のデータについて、mBalhag 方言に認められる蔵文対応の関係が他のどの方言に認められるかを大まかにまとめるならば、以下のようなになるだろう。

例語番号	蔵文	mBalhag	A1	A2	A3	A4	A5	B6	B7	B8	B9	C11
11-13, 25, 26	<i>s, z</i>	/ʌ, ɸ/										
1, 2, 14, 15	<i>Py</i>	/s/系列						○				○
	<i>Py</i>	/c/系列	○	○	○	○	○	○	○	○		○
3, 4, 16, 17	<i>Ky</i>	/ts/系列						○				○
	<i>Ky</i>	/tɕ/系列	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
5, 18-20	<i>Pr</i>	/c/系列	○	○		○	○					
6, 7, 21, 22	<i>Kr</i>	/c/系列	○				○					
8, 22	<i>Tr</i>	/t/系列	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
10, 24	<i>C</i>	/tɕ/系列				○		○	○		○	○
27-35	<i>l</i>	/j, <sup>h</sup> j, ç/				○	○	○	○	○		○
	<i>l</i>	/ʌ, <sup>h</sup> ʌ, ʌ/	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
36-39	<i>y</i>	/z/						○				○
	<i>y</i>	/z, <sup>h</sup> z/				○	○		○	○	○	
	<i>y</i>	/j/	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

この結果から、mBalhag 方言の特徴が他のどの方言群の特徴とも合致しないものが 1 点、逆にどの方言群の特徴とも一致するものが 4 点見いだされる。まず、前者となる蔵文 *s, z* が mBalhag 方言において /ʌ, ɸ/ と対応するという現象は、チベット語諸方言全体を見渡しても同方言に限って体系的に認められるのであり、確かに典型的にも特別な音対応であると断言できる。次に後者の特徴をみると、いずれもカムチベット語の中では最も広い範囲で認められる音対応といえることができる性格のものであり、これらの特徴から方言の特徴づけを行うのは難しいと考えられる。

4 節の冒頭において、同一の蔵文形式に複数の音対応が認められることが mBalhag 方言の特徴であると述べた。その中から地域特徴を議論するならば、特定の音対応が限られた範囲の方言群にのみ認められるものを拾い上げなければならないと考えられるため、以上の 5 つの特徴を除いたものが考察対象になりうる。以上の 5 つの特徴を消去した表を再掲すると、以下のようなになる。

藏文	mBalhag	A1	A2	A3	A4	A5	B6	B7	B8	B9	C11
Py	/s/系列						○				○
Py	/ç/系列	○	○	○	○	○	○	○	○		○
Ky	/ts/系列						○				○
Pr	/ç/系列	○	○		○	○					
Kr	/c/系列	○				○					
C	/tç/系列				○		○	○		○	○
l	/j, <sup>h</sup> j, ç/				○	○	○	○	○		○
y	/z/						○				○
y	/z, <sup>h</sup> z/				○	○		○	○	○	

以上の特徴の中で、mBalhag 方言の音対応と同様の音対応をもつ方言群で共通項が多く認められるのは B6, C11（それぞれ 6 項）となるが、両者は互いに異なる方言群に属している。一方、これらはいずれも mBalhag 方言の分布地域とほど近いところで話される方言群である。

ここで注目したいのは、藏文 y 対応形式で、/z/に対応する方言群（A4, A5, B7, B8）と/z/に対応する方言群（B6, C11）は完全に分かれており、mBalhag 方言のように双方の対応形式をもっている方言は存在しないということである。このことから、mBalhag 方言と共通点を最も多くする A4 の方言群と B6, C11 の 2 種は音対応の特徴という面で明確に異なるといえる。これは藏文 Py, Ky 対応形式に歯茎音が対応するか（B6, C11）否か（それ以外）という点からも理解できる。

以上の分析から、mBalhag 方言は周辺に分布する方言群を特徴づける音対応をそれぞれ合わせ持っているということがいえる。

#### 4.2.2 mBalhag 方言における藏文対応関係の多様性に関する分析

次に、mBalhag 方言において複数ある藏文との音対応と語彙の関係を分析する。4.1 と同様に藏文阻害音字の例と藏文共鳴音字の例に分けて考察する。

まず、3.1.4 で扱った藏文足字 y 対応形式で挙げた例を再掲する。

歯茎音例	前部硬口蓋音例
ʼs <sup>h</sup> uʔ 「家畜」 ( <i>phyugs</i> )	ʼɕ <sup>h</sup> i: x <sup>h</sup> a 「半分」 ( <i>phyed kha</i> )
ʼsa 「鶏」 ( <i>bya</i> )	ʼɕə wā 「砂」 ( <i>bye ma</i> )
ʼh <sup>h</sup> səʔ x <sup>h</sup> a 「春」 ( <i>dp<sup>y</sup>ad ka</i> )	ʼfi <sup>h</sup> za x <sup>h</sup> a 「夏」 ( <i>dbyar kha</i> )
ʼts <sup>h</sup> ə 「犬」 ( <i>khyi</i> )	ʼtɕ <sup>h</sup> əʔ 「あなた」 ( <i>khyod</i> )
ʼtsɔ 「壁」 ( <i>gyang</i> )	ʼh <sup>h</sup> tci: pu 「幸せな」 ( <i>sk<sup>y</sup>id po</i> )
ʼfi <sup>h</sup> dzeʔ 「8」 ( <i>brgyad</i> )	ʼfi <sup>h</sup> dza 「100」 ( <i>brgya</i> )

これらの例から考えると、どちらの調音点で現れるかはおよそ語義と関連をもたないように見える。しかし最後の対を考えると、「8」と「100」は同じ数詞でも日常よく使われるかどうかには異なりがあると考えられ、前者のほうがより基本的な語彙といえる。つまりより基本的な語彙は歯茎音の調音点で実現されると考えることができる。このとき、日常的な語彙と考えられる動物「鶏」「犬」についても同様と考えられる。一方、「春」と「夏」は同じ季節でありながら異なりがあるという点は説明がつけにくい。さて、ここで述べた「より基本的な語彙」という考え方は、これらがより mBalhag 方言の中核に位置づけられるもの、言い換えれば、同方言本来の特徴を保持しているものといえる。すると、歯茎音をもつ「春」は「夏」よりもより基本的な語彙という位置づけにあるのではなく、「夏」の形式は mBalhag 方言本来の形式ではない、という可能性を仮定できる。さて、rGyalthang 方言 (A1) など mBalhag 方言の周辺に分布する諸方言の中には、「春」「夏」を区別せず「暖かい季節」というカテゴリーに蔵文 *dbyar kha* 対応形式を用いるものが複数見られ、しかもそれらの方言における初頭子音が <sup>h</sup>z になっていることを考えると、mBalhag 方言の「夏」はそれらの方言から借用した可能性が出てくることになる。当然ながら、「春」「夏」のような初頭子音の調音点の異なりに対する上の解釈は、ただこれらの語に対してのみ有効で、たとえば人称代名詞「あなた」は基本的な語彙であると通例判断されるにもかかわらず歯茎音で現れないなど、説明できないことは複数ある。しかしながら、全体的に見るならばやはり歯茎音で実現されるものが mBalhag 方言の中核に位置づけられる語を多く含んでいると言ってよいだろう。ここで 4.2.1 の分析を考えると、蔵文 Py, Ky 対応形式が歯茎音になるのは B6 と C11 の方言群に属する諸方言に限定されることがわかる。mBalhag 方言の中核を形成する語彙がこれらの方言に近い特徴を持っているということになる。

しかし一方、3.1.5 で扱った蔵文足字 r 対応形式の事例は直前の類型と異なる特徴を



示す。以下に蔵文 Kr, Pr 対応形式のいくつかを再掲する。

非そり舌音系列	そり舌音系列
ʰzu: 「蛇」 ( <i>sbrul</i> )	ʰtō tʰaʔ 「1000」 ( <i>stong phrag</i> )
ʰç̥ɛ̃ ŋa 「数珠」 ( <i>phreng ba</i> )	ʰde: 「米」 ( <i>'bras</i> )
ʰjə 「めすヤク」 ( <i>'bri</i> )	ʰə tʰaʔ 「1 万」 ( <i>khri phrag</i> )
ʰaʔ 「血」 ( <i>khrag</i> )	ʰta tsʰō 「寺」 ( <i>grwa tshang</i> )
ʰcə 「ナイフ」 ( <i>gri</i> )	

mBalhag 方言において、蔵文足字 r 対応形式もまた複数の音対応を見せるが、先と同様に数詞の日常性に注目した場合、「1000」や「1 万」は当然ながら日常的に用いないものと考えられるため、これら 2 例およびそり舌閉鎖音をもつ例は借用した形式と考えることができる。すると、蔵文 Pr 対応形式は前部硬口蓋摩擦音で蔵文 Kr 対応形式は硬口蓋閉鎖音というのが mBalhag 方言についてより本来的な対応関係であったといえる。また、「めすヤク」の例で初頭子音が前鼻音つき硬口蓋閉鎖音で現れているのは、蔵文 Pr 対応形式がそもそも硬口蓋摩擦音で発音されていた可能性が高いと考えられる。この仮説は Suzuki (2011) で Melung 下位方言群を除く Sems-kyi-nyila 方言群に当てはまると議論されている。また、4.2.1 からも蔵文 Pr 対応形式が前部硬口蓋摩擦音に対応するのは A1, A2, A4, A5 に限定されて見られる特徴であり、蔵文足字 r 対応形式は、蔵文足字 y 対応形式と異なり、A 方言群に典型的に近いといえる。

次に、3.1.7 から 3.1.9 にかけて扱った蔵文 l, y の例を考える。まず、蔵文 l 対応形式の例を再掲する。

/j/の例	/l/の例
ʰjā 「道」 ( <i>lam</i> )	ʰlu: pə 「体」 ( <i>lus po</i> )
ʰja: kwa 「手」 ( <i>lag pa</i> )	ʰle: 「縁」 ( <i>las</i> )
ʰju 「年」 ( <i>lo</i> )	ʰlɛ: pa 「脳」 ( <i>klad pa</i> )
ʰje ɣɛ: 「月 (天体)」 ( <i>zla dkar</i> )	ʰlɛ̃ ŋu 「笛」 ( <i>gling bu</i> )
ʰju 「馬の腹帯」 ( <i>glo</i> )	ʰla mə 「ラマ」 ( <i>bla ma</i> )

以上は mBalhag 方言で有声音に対応するもののみ限定しているが、対応形式が/j/のものは/l/のものに比べてより日常的に用いる語彙であるといえるかもしれない。「体」

は日常的に用いられうる語彙ではあるが、可能性として宗教用語「身口意」の「身」に対応するものでもあり、借用形式ということも考えられうる。また、3.1.9 に示した蔵文 lh, sl 対応形式の多くが硬口蓋摩擦音/ç/であることを考えると、mBalhag 方言の中核を形成する語彙は硬口蓋で調音されるという特徴を持っているということになる。

一方蔵文 y 対応形式は次のようになる。

/z, z/の例

˘zi gi 「文字」(yi ge)

˘fi zaʔ 「ヤク」(g.yag)

˘fi ze fiö 「花椒」(g.yer ma)

/j/の例

˘ja x<sup>h</sup>a 「上」(yar kha)

˘jaʔ 「よい」(yag)

以上の3つの音対応のうち、どれが mBalhag 方言の中核を形成する語彙かを判断するには、現段階では資料が不足している。しかし 4.2.1 の諸方言群の類型に照らせば、蔵文 y 対応形式が/z/になるのは蔵文 Py, Ky 対応形式が歯茎音になる諸方言に限られていることから、直前に見たように、mBalhag 方言は蔵文 Py, Ky 対応形式が歯茎音になる方言の1つといえ、蔵文 y 対応形式が/z/になっているものを mBalhag 方言の中核を形成する語彙と考えることは理にかなうといえる。とはいえ、蔵文 y について3つもの音対応をもつ方言はこれまで見られないことから、/z/をもつ語は A4, A5, B7, B8, B9 などの方言群から借用したものである可能性を認めることになる。

以上の分析から、mBalhag 方言はその基本的な語彙に認められるチベット言語学上の主要な音対応が複数の方言群にまたがって共通していることが明らかになった。

## 5 まとめ

本稿では、ほぼ未記述であるカムチベット語 mBalhag 方言について、まず音声分析を行って音体系を概観し、次に蔵文と対照することを通じて同方言の音対応の特徴を明らかにした。その結果を mBalhag 方言を取り巻く地域に分布するチベット語諸方言との比較を行った。その結果、mBalhag 方言はチベット言語学の観点から見て次の点特徴的であるといえる。

1. mBalhag 方言はその周辺に分布する Sems-kyi-nyila, sDerong-nJol, Chaphreng 各方言群のチベット言語学上重要な音特徴をそれぞれ部分的に共有している。

2. 1. の特徴自体が mBalhag 方言にのみ見られる特筆に値する特徴である。

具体的な現象をあげると、次のようになる。

- mBalhag 方言にのみ特徴的な現象として、藏文 s, z に /ʃ, ʒ/ が対応する。
- 藏文 Py, Ky, Pr, Kr, l, y について、それぞれ複数の音対応が認められる。

以上のうち、mBalhag 方言の本来語彙の音対応について、藏文 Py, Ky, l, y 対応形式が sDerong-nJol 方言群 sDerong 下位方言群および Chaphreng 方言群 gTorwarong 下位方言群に近い対応関係を見せる一方、藏文 Pr, Kr 対応形式は Sems-kyi-nyila 方言群の大部分の方言と近い対応関係を見せることもわかった。

筆者は以上の結果と mBalhag 方言の通用性が sDerong-nJol 方言群の諸方言との間で高くなるという話者の意見から、mBalhag 方言が sDerong-nJol 方言群に属する方言であると考え。しかし本稿の分析は音対応の関係が sDerong-nJol 方言群 sDerong 下位方言群に近い特徴を複数持っている点を示してはいるが、それ以外の方言群とも少なくない特徴を共有している。

方言所属を確定する作業については、おそらく音変化を取り扱う際には古期の形式（ここでは藏文）と現代語の形式をつなげるだけでは不十分であり、音変化の生じた時間的順序すなわち音変化の相対年代をより細かく特定していくといった方法で今後さらに検証を行う必要がある。通用性に関する問題については、諸方言の文法を記述することによって比較対照ができる状況になって初めて具体例に基づいた議論ができるだろう。

本稿で言及した方言名

本文中に掲げた mBalhag 方言以外の方言名とその分布地域（県名および郷鎮名、必要であれば自然村名も）の関係は次のとおりである。

sDerong	得榮県松麦鎮
Zulung	得榮県日龍郷
mPhagri	得榮県八日郷
gTorwarong	香格里拉県東旺郷普呂村
Lamdo	香格里拉県格咱郷浪都村
Phuri	香格里拉県格咱郷普上村
sKadrag	香格里拉県格咱郷初古村
rGyalbde	香格里拉県建塘鎮吉迪村
rGyalthag	香格里拉県建塘鎮錯古龍村
Yangthag/G	香格里拉県小中甸郷吉念批村
Yangthag/C	香格里拉県小中甸郷吹窪丁村
Nyishe	香格里拉県尼西郷湯滿村
Thoteng	德欽県拖頂僂僂族郷
Byagzhol/B	德欽県霞若僂僂族郷相多村
Byagzhol/S	德欽県霞若僂僂族郷石茸村
Qidzong	維西県塔城郷其宗村
mBacug	維西県塔城郷巴珠村
Zhollam	維西県攀天閣郷勺洛村
Melung	維西県永春郷
mThachu	維西県塔城郷柯那村
Daan	永勝県大安彝族納西族村（麗江市）
gYagrwa	德欽県羊拉郷
sPomtserag/G	德欽県奔子欄郷古龍村
Foshan	德欽県佛山郷
nJol	德欽県升平鎮
lCagspel	德欽県雲嶺郷佳碧村
gYanggril	德欽県雲嶺郷永支村
Tsharethong	德欽県雲嶺郷查里通村
sNyingthong	德欽県燕門郷尼通村
Sakar	德欽県燕門郷斯嘎村
Budy/J	維西県巴迪郷結義村

各方言名は藏文形式を基礎に現地の発音に近くなるよう一定の変更を加えたものであり、Suzuki (2009; 2012) などでも用いられている。藏文形式が判明しない地名については、漢語のピンインを用いて示している。また、村名の漢字表記も複数ある場合が存在し、必ずしも呉光范 (2009) の記載とは一致しない。

## 付 記

本稿の一部は 2011 年 12 月に行われた RCLT Seminar (La Trobe University, Melbourne) において “Phonological idiosyncracies of mBalhag Tibetan (Yunnan, China): A dialect in a thousand years of isolation” という題目で発表したものを発展させたものである。発表の際には David Bradley, Randy LaPolla, Nicolas Tournadre の各氏より貴重なコメントをいただいた。

mBalhag 方言の調査は、友人であるツェリン・ラモ [Tshe-ring Lha-mo] さんの手配によって実現した。また、mBalhag 方言の調査協力者として主にツェリン・ラツ [Tshe-ring Lha-mtsho] さんとケラン・チュドゥン [sKal-bzang Chos-sgron] さんの協力を得た。ここに記して感謝の意を表する。筆者による言語資料収集に関する現地調査については、以下の援助を受けている。

- 平成 16-20 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (S) 「チベット文化圏における言語基層の解明」(研究代表者：長野泰彦，課題番号 16102001)
- 平成 19-21 年度日本学術振興会科学研究費補助金 (特別研究員奨励費) 「川西民族走廊・チベット文化圏における少数民族言語の方言調査と地域言語学的研究」
- 平成 21-23 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A) 「ギャロン系諸言語の緊急国際共同調査研究」(研究代表者：長野泰彦，課題番号 21251007)

## 注

1) 現在、巴拉村の村民はみな巴拉村から 7 キロ程度離れた崗曲 [sGam-chu] 河沿岸に移住し、2 か村 (那浪 [gNam-langs] 村、水荘 [sPre'u-'jug] 村) を形成している。両村間の距離は 2 キロ程度で、いずれも本来の巴拉村民のみが暮らしている。移住は 1992 年から段階的に行われ、2009 年に全戸の移住が完了した。それゆえ、巴拉村自体は常時居住する人が不在になったため廃村となってしまったが、いくつかの家はかつて村から建塘鎮に移住した人々が里帰りした時に使用される。

しかしながら本稿では、移住の時期がごく最近であること、移住の経緯が明確なことから、村民が巴拉村への帰属意識を共有していることから、先の 2 か村をまとめて「巴拉村」と呼び、村民の話す言語も mBalhag 方言とひとくくり扱う。

鈴木 カムチベット語香格里拉県巴拉 [mBalhag] 方言の方言特徴

2) ただし、近親婚を避けるため、巴拉村の周辺域に存在する村落の村民と通婚している。主な村落には、香格里拉県東旺 [gTor-ma-rong] 郷新聯村、得榮 [sDe-rong] 県古學 [sKed-shod] 郷下擁 [Shwa-lam] 村、同県子庚 [rTse-gan] 郷崗學 [sGam-shod] 村などがある。いずれも巴拉村から徒歩で2~3日程度の距離がある。

3) 現在、巴拉格宗を紹介するパンフレットなどに書かれている移住の歴史の中には、1300年前に移住したという記述がある。しかしこの年代設定は観光開発に伴いアレンジされたものである。口承による巴拉村民の系譜をたどると、600年前には彼らの先祖がほぼ現在の巴拉村に暮らしていたといえる。

なお、巴拉格宗に関する出版物はいくつか存在するが、いずれも内部発行の資料で、公式に出版されたものは未見である。ただし、公式に発売されたDVDに『回歸巴拉格宗』（遼寧廣播電視音像出版社、2010年）、『相約巴拉格宗』（珠影白天鷺音像出版社、2012年）の2編があり、巴拉村の映像が収録されている。

4) 注2で述べたように、巴拉村民は巴拉村周辺のいくつかの村落とは通婚関係をもっている。ただし巴拉村の方言は、その通用性の低さゆえ、巴拉村以外ではまったく継承されないか、直系一代にのみ継承されるにとどまるという。言語使用の詳細については今後の研究を俟つ必要がある。

## 参考文献

- 格桑居冕 [sKal-bzang 'Gyur-med]・格桑央京 [sKal-bzang dByangs-can]  
2002 『藏語方言概論』北京：民族出版社。  
2004 『實用藏文文法教程 [修訂本]』成都：四川民族出版社。
- 西 義郎  
1986 「現代チベット語方言の分類」『国立民族学博物館研究報告』11(4): 837-900; 1 地図。
- 西田龍雄  
1987 「チベット語の変遷と文字」長野泰彦・立川武蔵編『チベットの言語と文化』pp. 108-169, 東京：冬樹社。
- 瞿靄堂 [Qu, Aitang]・金效静 [Jin, Xiaojing]  
1981 「藏語方言的研究方法」『西南民族學院學報』第3期 76-84。
- 鈴木博之  
2005 「チベット語音節構造の研究」『アジア・アフリカ言語文化研究』69: 1-23。  
2008a 「迪慶州瀾滄江流域カムチベット語（徳欽/雲嶺/燕門/巴迪方言）の方言特徴」『ニダバ』37: 115-124。  
2008b 「迪慶藏語是康巴藏語中的“一個”次方言嗎」『康定民族師範高等專科學校學報』第3期 6-10。  
2009a 「迪慶州カムチベット語の方言比較——方言の下位区分をめぐって」『平成16-20年度科学研究費補助金 [基盤研究 (S)] 「チベット文化圏における言語基層の解明——チベット・ビルマ系未記述言語の調査とシャンシュン語の解読」 (研究代表者：長野泰彦) 研究成果報告書』3: 1-13。

- 2009b 「迪慶州金沙江流域カムチベット語（奔子欄/尼西/拖頂/霞若/其宗方言）の方言特徴」『ニダバ』—38: 29-38。
- 2009c 「川西地区“九香線”上の藏語方言—分布與分類」『漢藏語學報』第 3 期 17-29。
- 2009d 「納西文化圏のチベット語・永勝県大安 [Daan] 方言の方言所属」『国立民族学博物館研究報告』34(1): 167-189。
- 2009e 「カムチベット語奔子欄 [sPomtserag] 方言の音声分析」『アジア・アフリカの言語と言語学』4: 219-258。
- 2010a 「硬口蓋調音の多様性とその表記—雲南省のカムチベット語諸方言の記述から見た考察」大西正幸・稲垣和也編『地球研言語記述論集』2: 107-113。
- 2010b 「カムチベット語燕門/斯嘎 [Yanmen/Sakar] 方言の方言特徴」『ニダバ』39: 78-87。
- 2010c 「カムチベット語香格里拉浪浪都 [Lamdo] 方言の方言所属」『国立民族学博物館研究報告』35(1): 231-264。
- 2010d 「カムチベット語維西塔城 [mThachu] 方言におけるそり舌化母音—その音声学的特徴の記述と分析」『京都大学言語学研究』29: 27-42。
- 2011a 「嘎嘎塘藏語の咽化元音與其來源」『語言暨語言學』第 12.2 期 477-500。
- 2011b 「在音變過程中產生又消失的軟顎化元音—雲南德欽燕門鄉穀扎藏語之例」『京都大学言語学研究』30: 35-49。
- 2012 「迪慶州香格里拉中央域カムチベット語（建塘/小中甸/格咱方言）の方言特徴」『ニダバ』41: 61-70。
- Suzuki, Hiroyuki
- 2008a *Development of the affricate series in Shangri-La Tibetan*, unpublished manuscript presented at 14th Himalayan Languages Symposium (Göteborg).
- 2008b */l/ - /j/ interchange in Shangri-La Tibetan*, unpublished manuscript presented at 41st International Conference of Sino-Tibetan Languages and Linguistics (London).
- 2009 Introduction to the method of the Tibetan linguistic geography: a case study in the Ethnic Corridor of West Sichuan. *Linguistic Substratum in Tibet: New Perspective towards Historical Methodology, 2004-2008 Grant-in-Aid for Scientific Research S Final Research Report* (Principal Investigator: Yasuhiko Nagano) 3: 15-34, National Museum of Ethnology.
- 2011 *Development of prepalatal and palatal articulations in Khams Tibetan spoken in bDechen Shangri-La (Yunnan)*, paper presented at 17th Himalayan Languages Symposium (Kobe).
- 2012 À propos du terme 'riz' et de l'hypothèse du groupe dialectal Sems-kyi-nyila en tibétain du Khams. *Revue d'étude tibétaine* 23: 107-115.
- (forthcoming) Extraordinary sound development of \*s and \*z in mBalhag Tibetan. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area*.
- 鈴木博之・丹珍曲措 [rTa-mgrin Chos-mtsho]
- 2012 「德欽県雲嶺郷のカムチベット語における消滅の危機に瀕しているかもしれない齒茎破擦音について—方言差と年代差と個人差のあいだで」稲垣和也編『地球研言語記述論集』4: 159-163。
- 鈴木博之・ツェリ・ツォモ [Tshe-ring mTsho-mo]
- 2007 「カムチベット語維西 [Melung] 方言の r 化母音とその来歴」『京都大学言語学研究』26: 93-101。
- 吳光范 [Wu, Guangfan]
- 2009 『迪慶・香格里拉旅遊風物誌—沿著地名的線索』昆明：雲南人民出版社。
- 張濟川 [Zhang, Jichuan]
- 1993 「藏語方言分類管見」戴慶廈等編『民族語文論文集—慶祝馬學良先生八十壽辰文集』pp. 297-309. 北京：中央民族學院出版社。
- 2009 『藏語詞族研究—古代藏族如何豐富發展他們的詞匯』北京：社會科學文獻出版社。
- Zhang, Jichuan
- 1996 A sketch of Tibetan dialectology in China: Classifications of Tibetan dialects. *Cahiers de Linguistique - Asie Orientale* 25(1): 115-133.
- 朱曉農 [Zhu, Xiaonong]
- 2007 「說鼻音」『語言研究』第 3 期 1-13。
- 2010 『語音學』北京：商務印書館。